



St. Luke's College of Nursing

Booklet 1

聖路加看護大学のあゆみ

聖路加看護大学
大学史編纂・資料室 編

聖
路
加
看
護
大
学
の
あ
ゆ
み



St. Luke's College of Nursing



*St. Luke's
College of Nursing*

聖路加看護大学のあゆみ

聖路加看護大学
大学史編纂・資料室 編



創立九〇周年に際して

聖路加看護学園 理事長・名誉学長 日野原 重明

このたび、聖路加看護大学の創立九〇周年を記念して、小冊子を刊行するに当たり、長年、この大学教育に参与して来たものとして、この記念号発行の労をとって来られた同窓生の方々に感謝の言葉を述べたいと思います。

私が一九四一年（昭和一六）に聖路加国際病院に就職した戦前は、本学は聖路加女子専門学校（St. Luke's College of Nursing）と呼ばれ、日本での最初の高等看護教育（三カ年の看護課程と一年の保健課程）を行っていました。私はこの聖路加女子専門学校の時代から看護教育に参与しました。日米戦争中は興健女子専門学校と改称されましたが、戦争直後は校舎は聖路加国際病院と共にGHQに接收されました。GHQ公衆衛生福祉局看護課は広尾の日本赤十字社救護看護婦養成部と聖路加女子専門学校とを合併させて、東京看護教育模範学院を開き、私はそこで基礎看護学を教えました。その後、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校の校舎の一部がGHQから返還となり、一九五四年（昭和二九）には聖路加看護短期大学となり、一九六四年（昭和三九）には四年制の聖路加看護大学となりました。

私は一九七一年（昭和四六）には学長代理となり、一九七四年（昭和四九）からは学長に就任しました。

私の就任時の目標は大学院を発足することで、一九八〇年（昭和五五）には大学院修士課程を発足し、一九八八年（昭和六三）には大学院後期課程の博士課程を発足させました。

一九九六年（平成八）に聖路加国際病院からの資金提供により、新校舎として、現在の第一街区のチャペルのある建物の西側に地下一階、地上五階の建物が増え、竣工しました。

その礎石に私は「あなた方の愛が、深い知識において、鋭い感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなた方が何が重要であるかを判別することができ、キリストの目に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光と誉れとを表すように至るように」という聖句を略して「知と感性と愛のアート」（平成八年九月）と刻みました。これは、新約聖書のピリピ人への手紙一章九節にあるパウロの手紙の中の文章の中から取りだした言葉で、この大学の建学精神を示す言葉であります。

聖路加看護大学はその後平成一三年には地下鉄築地駅近くに二号館として、大学院および看護実践開発研究センターとして、この土地と建物を購入し、大学が地域住民のためにも教育活動を行う事を実践して参りました。

二〇一〇年（平成二二）四月からは修士課程に周麻酔期看護学を発足させ、さらに小児看護や助産の領域での高度な実践家を養成するための課程を強化して、麻酔医、産科医、小児科医の不足する日本の医療に熟練された専門ナースが貢献することを願っています。

以上のごとく急速に変遷する看護界、医療界に本学はさらに大きく貢献することを願って、私の挨拶とします。

「聖路加看護大学のあゆみ」発刊によせて

学長 井部 俊子

聖路加看護大学が二〇一〇年（平成二二）に九〇周年を迎えるにあたり、この素敵なブックレット（小冊子）を皆さんに届けたいと思います。このブックレットは、聖路加看護大学がどのような考え方をもち、どのような変遷をたどって今日に至っているのかを二六項目のQ&Aによってわかりやすく解説しています。あなたはどの項目に注目されるでしょうか。

聖路加看護大学で学ぶということは、いったいどういうことなのでしょう。そこでは、聖路加の精神というべきものがひとつの中に植えつけられます。本学の価値観や伝統が伝承され、行動様式まで影響を受けるようです。

昨今、各大学は固有の特色をアピールするために「スクール・アイデンティティー」を大切に、いわゆる自校教育の活動に注目しています。学生のアイデンティティーやモチベーションも自校教育とは無関係ではありません。大学への帰属意識をもってもらうことや、大学で学ぶことへの意義を見出してもらおうといったいわば自己探求のための教養教育として位置づけられている大学もあります。（渡部尚子「自校教育」の現在、学園ニュース No.288, October 2009）

聖路加看護大学は、開学以来、キリスト教精神に基づく明確なミッションをもち、モチベーションの高い学生が

入学してきました。大学のミッションは、チャペルや十字架、校舎の色彩やモニュメントに反映され、そのミッションを教育や実践の中で具現化するために、高い志をもった教職員に引き継がれてきました。このブックレットは、現代に生きるわれわれの未来に向けたメッセージでもあります。

このブックレットの完成には多くの方々との協力を得ました。二〇〇六年（平成一八）に「大学史編纂・資料室検討委員会」を発足させ歴史的資料の収集を開始いたしました。二〇〇七年度（平成一九）の創立記念講演会では、大学のアーカイブ構想と進捗状況を報告し、寺崎昌男先生（東京大学名誉教授）や川嶋みどり先生（日本赤十字看護大学）から助言を得ました。二〇〇八年（平成二〇）四月からは「大学史編纂・資料室」に渡部尚子先生を室長として迎えて、より精力的に活動が展開されました。本学の卒業生である大先輩からのオーラル・ヒストリーの収集も行われました。

そして、このブックレットの作成のために、ワーキンググループを作り編集作業を担っていただきました。執筆者はすべて本学の卒業生と教職員です。ブックレットにはナンバーがつけられています。今後、第一号から二号、三号と引き継がれていくことでしょう。ブックレットの作成に貢献して下さった皆さまに感謝いたします。

聖路加の未来に贈るブックレットが、本学の学生であること、卒業生であること、教職員であることを誇りに思う「効能」をもたらすことと信じています。



図書館内階段の踊り場に設置された
スタンドグラス

目次

	創立九〇周年に際して	理事長 日野原 重明
	「聖路加看護大学のあゆみ」発刊によせて	学 長 井部 俊子
1	聖路加看護大学は開学からどのような教育理念のもとに、どのような看護職を育てようとしてきたのですか。	1
2	聖路加看護大学の名前の由来を教えてください。	5
3	聖路加看護大学は、いつ、誰が創設したのですか。	8
4	聖路加の地は、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭の邸跡地で居留地であったと聞いています。なぜそのような地が選ばれたのですか。	12
5	聖路加国際病院付属高等看護婦学校・聖路加女子専門学校における外国人教師による看護の授業はどのようなものでしたか。	15
6	聖路加看護大学は米国聖公会と関係が深いと聞きましたが、どういことですか。	19
7	聖路加の校章・校歌はどんな経緯でつくられたのですか。	22
8	米国の看護教育を取り入れていた本学は、戦時中、どのような状況になりましたか。	28
9	終戦直後、聖路加は米国に接収された時、病院や学校はどうなったのですか。	34
10	戦後日本の看護改革において聖路加の多くの卒業生が貢献したといわれていますが、具体的にどのようなことですか。	36
11	東京看護教育模範学院の名のもとに聖路加と日本赤十字社が合同して看護教育を行ったと聞いています。その時の様子を教えてください。	41
12	学生寮があったと聞きました。寮生活はどのような様子でしたか。また、現在の学生行事は何時からあったのですか。それに纏わるエピソードがありますか。	44

13	聖路加看護大学と聖路加国際病院との関係を教えてください。	48
14	聖路加の卒業生は、よいナースでよいお嫁さんになれると言われていたそうですが、本当ですか。	51
15	短期大学と大学の教育で何が一番わかりましたか。	56
16	大学や大学院の開設時には、どのような困難がありましたか。	59
17	長く続いた女子教育の中に男子学生が受け入れられるようになったのはなぜですか。	64
18	聖路加看護大学の学長はどのようにして選ばれるのですか。また、歴代の学長(校長)はどのような方でしたか。	67
19	WHOコトリボーディングセンターとはどのような役割・機能をもつセンターですか。	70
20	聖路加看護大学は最近、「二一世紀COEプログラム」という大型の研究費を得て、看護学の分野では先端の研究をおこなっているとききました。詳しく教えてください。	75
21	聖路加の卒業生でナインゲール記章を受賞した人がいますか。その方達のことを教えてください。	79
22	聖路加の卒業生には、開発途上国における看護活動をした人が多いと聞いていますが、どんな活動をしているのでしょうか。	83
23	聖路加同窓会はどんな活動をしていますか。	89
24	聖ルカ礼拝堂はどのようなところですか。	92
25	聖路加看護大学には、こんな由緒ある品々があります。	96
26	聖路加看護大学はどのような将来展望を持っていますか。	104
	おもな引用・参考文献	
	編集後記	



聖路加看護大学は開学からどのような教育理念のもとに、どのような看護職を育てようとしてきたのですか。

今私たちが立っているこの校舎は、一九九六年（平成八）に完成し、チャペルの東翼にあった校舎から引っ越してきたものです。一九三三年（昭和八）にできた校舎から、マントルピースも引っ越してきましたし、木製のデスクチェアも引っ越してきました。アリス・C・セントジョン(Alice C. St. John)メモリアルホールは、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校の教育責任者であり、『聖路加ナースの母』(Mother of St. Luke's Nurse)と呼ばれたミセス・セントジョンに由来しています。

本学は、一九二〇年（大正九）秋、聖路加国際病院付属高等看護婦学校に一期生が入学して以来、九十年を迎える今日、看護学部、看護学研究科博士前・後期課程ならびに看護実践開発研究センターを有するまでに発展してきました。本学のたゆまぬ発展の原動力は、綿々と受け継がれてきた「本邦の看護の標準の向上せしむるために」という、創立者トイスラー(Rudolf Bolling Teusler)の学校設立の趣旨

にほかなりません。

一九二〇年（大正九）当時、既に日本で看護教育は始まっていました。しかしトイスラーは、医学の水準は十分でありながら、患者が回復できないのは看護が十分だからである、と看護婦学校を作ったのです。しかも、教育に専従するミセス・セントジョンを米国から招いた上でのことでした。米国並びにカナダの最高の看護教育と同等の教育を行うこと、聖路加国際病院のための看護師養成ではなく、日本の看護の質向上を目指したことが、学校開設時の特徴でした。具体的には、高等女学校(現在の高等学校と同等)の卒業を入学資格とし、これは現在の大学入学資格に匹敵するものでした。義務教育が小学校だった時代ですから、志願者がいないのではないかと心配されたほどの教育レベルの高さでした。また、卒業後に聖路加国際病院への就職を義務付けませんでした。この二つの特徴故に、日本の看護教育の歴史の中で、看護の高等教育は聖路加で始まったと評価されるのです。

学校開設後すぐに、学校保健、産婆(助産師)さらに公衆衛生を教育課程に取り入れられました。予防と保健を看護の中に含め、保健師の制度がない時代から公衆衛生看護を教育していたことも、本学の大きな特徴です。

一九〇〇年（明治三三）、トイスラーは米国聖公会の宣教医として来日し、一九〇二年（明治三五）に病院を開設しました。開拓精神に富み、キリスト教の愛の精



ルドルフ・B・トイスラー



アリス・C・セントジョン

★高等女学校現在の高等学校と同等
一九二〇年開、女学看護学校は初めてあつた。

★保健師の制度

保健師活動のルーツは、一八八七年（明治二〇）、京都看護婦学校（同志社）がキリスト教精神にのっとった慈善事業として実施していた巡回看護にある。一九二〇年代には聖路加国際病院なども活動を始め、一九三五年（昭和一〇）に、聖路加国際病院から看護婦（当時、保健指導婦と称）が展開して、聖路加保健所のナルゲスとなつた保健所（現中井保健所）が設立された。一九三七年（昭和一二）保健師法、一九四一年（昭和一六）保健婦規則が制定され、訪問看護、乳幼児、結核患者などが対象が法の下で行われた。戦後、GHQの指導のもと、一九四八年（昭和二三）に「保健婦助産看護婦法」が制定された（戦前、保健婦規則、看護婦規則、保健婦規則の三つの規則であった）。

神を医療に具現することをめざしたトイスラーは、米国並びに日本国内から精力的に寄付を集め、病院と学校の建物をつくりました。一度できた建物が関東大震災で壊滅したあとも、さらに寄付を集め、チャペルがある病院と学校を再建しました。本学は米国聖公会の信徒をはじめとし、多くの米国市民の寄付と、ロックフェラー財団からの寄付、また日本国内からの寄付、関係機関からの理解によって建てられたのです。その根幹には、トイスラーのキリスト教への信仰と、『最善をつくせ、しかも一流であれ (Do your best and it must be first class)』の精神があったことを、覚えておかなければなりません。

キリスト教の愛の精神は、『その人に関心を持って思いやること』と言い換えることができます。トイスラーは、この愛の精神に基づいた教育を行うこと、またこの愛の精神を持って看護を行うことを、本学の精神として明示しました。キリスト教の精神に基づいて最高の教育を行い、教養ある看護職を育成し、日本の看護の質の向上をめざすというトイスラーの志は、ミセス・セントジョンによって具体化されました。ミセス・セントジョンは二〇余年の長きにわたり、聖路加国際病院付属高等看護婦学校および聖路加女子専門学校の教育の責任者として、カリキュラムをつくり、教員を集め、学生には品位 (dignity) を持つと指導されたと聞いています。ミセス・セントジョンは、本学のみならず、トイスラーが望んだとおり、日本

の看護教育の基礎を築き、それによって看護の質の向上に貢献したといえます。これは今日、本学にかかわった諸先生や卒業生、修了生が、全国の大学や医療・行政機関等で活躍していることから確信できます。

建学から九〇年、看護の高等教育機関としての発展は、学部教育にとどまらず、大学院教育と看護実践開発研究センターでの活動を生み出してきました。このために、二〇〇三年 (平成一五) に二号館が誕生しました。また、建学当時より女子教育を行ってきましたが、二〇〇一年 (平成一三) には男女共学になりました。このブックレットの後段で語られるように、本学は刻々と変化してきましたが、建学の精神は、今日、『知と感性と愛のアート』という日野原理事長の銘となって、校舎の礎石に刻まれています。

(菱沼典子)

*関東大震災
一九三三年 (大正二二) 九月一日、大地震が発生し、千葉県、茨城県から静岡県東部までの広い範囲に甚大な被害 (死者・行方不明者十四万三千八百人、住家全壊 十二万八千二百六十六戸) をもたらした。

*その人に関心を持って思いやること
西村哲郎チャプマンのクリスマスでの講演から。

*品位 (dignity) を持つ
前田マヤ、聖路加同窓会会員が社会に寄与するもの、聖路加同窓会誌より、1991.1992.1993



聖路加看護大学の名前の由来を教えてください。

聖路加看護大学の英語標記はSt. Luke's College of Nursing Jpn. 中の「St. Luke's」は後に聖人とされたルカの所有格で、「路加」はルカの当て字ということになります。この聖ルカは、どのような人物であったのでしょうか。ルカは、聖書に「愛する医者ルカ」(「コロサイの信徒への手紙 第四章一四節」と出てくることから、医者であったと推測できます。また、パウロ書簡にその名が記されていることから、伝道者パウロの随伴者であったと考えられます。おそらくこれらのルカは同一人物であったでしょう。そして、新約聖書の「聖ルカによる福音書」および「使徒言行録」の執筆者であると考えられています。彼は、イエスの昇天から五〇～六〇年経った西暦八〇～九〇年代に、それまで収集した数々の資料をもとに、イエス・キリストの使信の歴史を書き残しました。イエス・キリストによる世界の救済の使信を伝えた医師ルカの名を、世界中の多くの病院が病院名として用いています。

では、本学の形態は、この九〇年間にどのように変遷したのでしょうか。誕生から現在までをたどってみましょう。本学の初めの一步は、一九二〇年(大正九)聖路加国際病院付属高等看護婦学校開設に遡ることができます。一九一五年(大正四)には看護婦規則が制定され、看護婦は公衆の需(こようのひつぎ)に応じ、傷病者または褥婦(じよくふ)の看護の業を為す女子で、指定された学校で教育を受け一八歳以上で看護婦試験に合格しなければなりませんでした。試験科目は人体の構造、主要器官の機能、看護方法、衛生、伝染病、消毒法、繃帯術(ばうたい)、治療器械使用、救急処置などでした。看護婦学校への入学資格は高等小学校卒業または高等女学校二年以上の課程修了程度とされましたが、本学は、高等女学校卒業者のみを受け入れて、教育を開始しました。一九二七年(昭和二)には、本科三年、さらに公衆衛生看護等を選択する研究科一年を併せ持つ四年制課程の聖路加女子専門学校となります。看護婦養成所としては、我が国唯一の最高学位の教育機関となりました。

敗戦を迎えた一九四五年(昭和二〇)には、GHQ(連合国軍最高司令官総司令部)に聖路加国際病院が接収されます。GHQの計画により聖路加女子専門学校は日赤の敷地内に移転となり、日本赤十字社看護看護婦養成部との合同による東京看護教育模範学院として一九五三年(昭和二八)まで教育を続けました。

一九五四年(昭和二九)、接収が解除された築地に戻り、聖路加短期大学(二年

*パウロ書簡にその名が記されていることから、新約聖書のコリントへの手紙 二十四節、テモテへの第二の手紙 第四章十一節

*「聖ルカによる福音書」

ルカによる福音書は、当時の歴史的な記述の伝統にそって記されています。他の福音書にない、罪人や貧しい人々の救い、富の危険性への警告、悔い改めと罪に由来する行動の勧めなどが追加され、イエスの生、十字架の死のちに再び現われ、昇天された復活をおして、すべての人々の解放と救済を込めています。

*「使徒言行録」

使徒言行録は、初代キリスト者の伝道の物語を記したものです。

*GOTC(General Headquarters 連合国軍最高司令官総司令部)
第二次世界大戦後、ポツダム宣言受諾による開港条件に基づいて、わが国におかれた米軍占領(事実上米軍)の最高司令官部。

制)として教育を再開します。その十年後の一九六四年(昭和三九)には、聖路加看護大学となり、私学では本邦初の衛生看護学部として四年制教育を開始します。一九七六年(昭和五一)には看護短期大学卒業生を対象とした編入学制度を全国に先駆けて開始し、一九九八年(平成一〇)まで続けました。

一九八〇年(昭和五五)には、全国で二番目、私学では初めての看護系大学院修士課程を設置し、そして、一九八八年(昭和六三)には、全国で最初の看護系大学院博士課程を開設します。

一九九六年(平成八)には新校舎が完成し、現在の建物に移ります。翌一九九七年(平成九)より他学部を卒業した学士編入制度を設け、二〇〇〇年度(平成一二)からは男子学生の受け入れを開始します。また、大学院修士課程に専門看護師(CNS)コースを開設します。二〇〇二年(平成一四)には、築地三丁目に新たな土地と建物を得て、大学の二号館として看護実践開発研究センターを開館します。二〇〇三年(平成一五)には文部科学省が設けた研究拠点形成費である二一世紀COEプログラムの交付申請が認められ、「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」としての研究が盛んとなり、これによって本学の大学院教育が一層充実してきました。二〇〇五年(平成一七)には、修士課程にウィメンズヘルス・助産学専攻が増設されました。

(松谷 美和子)



聖路加看護大学は、いつ、誰が創設したのですか。

聖路加看護大学の創設について語るには、今から一五〇年前、米国聖公会による日本における宣教活動が開始されたこと、そしてこの宣教の過程において、聖路加国際病院が開設されたことを私たちは知る必要があります。

米国聖公会の日本の宣教は、一八五九年(安政六)にウィリアムズ司祭(Channing Moore Williams)が長崎に上陸した時に始まりました。ウィリアムズ司祭は長崎から大阪、東京へと宣教を進め、一八七四年(明治七)に築地に立教学校を創設したほか、医療伝道にも情熱を注ぎました。

ここで、『聖路加国際病院の二〇〇年』を繙くことにしよう。聖路加国際病院の創設に関しては次のように述べられています。

「一八九三年、医療伝道に協力してくれていた医師が宮内庁へ異動した為、ウィリアムズ主教の後任であったマキム主教は後継者の宣教医を探していました。米国バーミニア州にいたトイスラー(Rudolf Bolling Teusler)が耳につ、『自分は

*専門看護師 (JZC)
CNS: Certified Nurse Specialist
S 略。

*二一世紀COEプログラム
COE: Center of Excellence
プログラムを参照。

*ウィリアムズ司祭
日本聖公会の創始者。一八六六年(慶応三)中国・日本の「伝道主教」に任命される。「宣教の三位一体」といわれる教会・教育・医療の場において素晴らしい働きをなした。

*マキム主教
一八八〇年(明治一三)来日。立教学校で教職に就く。ウィリアムズ主教の後任として、一八九三年(明治二六)より日本主教となり、多くの教育・医療・社会事業施設を設立。

誰もやりたがらない仕事をやりたい」と東京行きを志願しました。マキム主教は、中国に宣教医師として赴任していたトイスラーの義兄であるウッドワードからトイスラーの意向を聞くと、すぐに宣教医師としての採用を決定しました。一九〇〇年、米国聖公会から派遣された第四番目の宣教医師としてトイスラーは二四歳の若さで来日しました。一九〇二年春、築地明石町に築地病院を聖路加病院と改称し診療を開始したのが、現在の聖路加国際病院の創設である。」

また、ここではトイスラーの生い立ちについても「トイスラーは（一八七六一九三四）、米国ジョージア州ロームで生まれました。父は、一八八一年に病死し、篤信で愛情深い母の厳しいしつけと、伯父ボーリング判事のキリスト教的訓練を受けて育ちました。バージニア州立医科大学を卒業し、二一歳で州立医学専門学校の助教授となり、メリー・ウッドワードと結婚してリッチモンドに家庭を持っていました。トイスラーは、冒険心と好奇心に富み、非常にてきぱきとした性格でした。」と述べ、若き日のトイスラー先生がどのような人であったかについて、今日の私たちの想像を助けてくれます。

さて、聖路加国際病院における看護の始まりはどのような人であったのでしょうか。聖路加病院の職員は初め、院長のトイスラー氏のほかは、看護婦の荒木いよ氏のみであったと述べられています。この聖路加国際病院の看護を創めたと言える荒木氏

は立教女学院卒業後、神戸のカナダミッション経営の看護学校において看護学と医学を二年間学び、神戸にて臨床看護を修めたのち、東京において外国人患者の家庭看護婦として働いていた時にトイスラー医師と出会ったとのこと。荒木氏は有能であったことから、トイスラーに勧められ、一九〇〇年（明治三三）から二年間、バージニア州リッチモンド市にあるオールド・ドミニアン病院付属看護婦学校への留学およびジョンス・ホプキンス病院やマウント・ウィルソン小児病院における研修を受けました。帰国後、荒木氏は初代の看護婦長となり、新館落成（一九三三年）の翌年、久保徳太郎氏（第二代院長・校長）と結婚するまで総婦長を務めたとのこと。

こうして聖路加国際病院とその看護が発展していく中、聖路加看護大学は、どのように作られたのでしょうか。トイスラーは、日本で宣教医として過ごすうち、日本の病院とその建築設備や看護婦の状態については欧米にはるかに劣っていることから、看護婦の技術の向上に伴って、品位教養と社会的な地位を高めることが日本社会には必要だと考えるようになったと「ルドルフ・B・トイスラー小伝」（中村徳吉著）に述べられています。

こうして一九二〇年（大正九）、聖路加国際病院付属高等看護婦学校が明石町に設立されました。米国の当時の標準に応じた専門職者としての看護婦養成を目指



荒木いよ

し、米国から看護教師セントジョンを招聘し開校しました。入学資格を高等女学校卒業生としたことは、当時の女子看護教育においては類を見ないことであり、非常に高学歴でした。三年間の教育課程を有する学校としてスタートし、さらに一九二七年（昭和二）に、研究科を含めて四年間の教育課程をもつ女子専門学校として文部省の認可を得ました。女子の最高学府における看護教育を我が国で最初に行なったのです。

（堀内成子）



聖路加の地は、忠臣蔵で有名な浅野内匠頭の邸跡地で
居留地であったと聞いています。
なぜそのような地が選ばれたのですか。

築地という地名は文字通り築かれた土地、埋立地を意味するもので、明石町界限は江戸時代一六五七年（明暦三）の明暦の大火後、それまで海であったところを埋め立ててできた地域です。

一七〇〇年代の元禄期には、現在十字架の塔がある一号館や聖路加看護大学校舎がある土地には忠臣蔵で有名な播州赤穂藩浅野内匠頭長矩の上屋敷がありました。江戸時代の古地図で当時の街並みを見ると大名や旗本の邸が建ち並び、由緒ある地域であったことが窺い知れます。

それにしても浅野家上屋敷の敷地面積八、八九〇坪、建坪三、三〇〇坪という広大な数字には驚いてしまいます。どうしてこの地に聖路加看護大学ができたのでしょうか。明石町は一八六九年（明治二）から一八九九年（明治三二）まで安政条約によって外国人居留地が開設されたところです。日本の中の外国といった風情で、当時まだめずらしかったホテルなど赤レンガに木造ペンキ塗りの洋館が次々と建築



「浅野内匠頭邸跡」の碑

されました。イギリス、オランダ、スイス、ドイツなどの領事館が置かれ、一八七五年（明治八）にはアメリカ公使館が麻布善福寺より居留地に移転してきました。それに伴い、布教のため聖公会をはじめ、外国の宣教師、教育者たちが次々にミッションスクールを開設しました。明石町界隈に点在する数々の記念碑が示すとおり、立教大学や明治学院大学、青山学院、女子学院などのルーツはここだったのです。

一八五八年（安政五）には福澤諭吉はこの地に慶応義塾大学の前身となる蘭学塾を開き、明石町は異国情緒が漂うエリアで先進的な学問を学ぼうとする人々が集まる教育の街でもありました。明石町十番地先ロータリーの三角地に日本近代文化事始の地として「慶応義塾発祥の地」と「蘭学の泉はここに」の二つの碑が建てられています。前野良沢、杉田玄白らがオランダ語の医学書ターヘルアナトミアを苦勞して翻訳し、「解体新書」を著したことは有名な話です。

また、幕末から明治にかけて外国からの商社も数多く進出し、ちなみに明治時代の地図を見ると現在聖路加看護大学が建っている場所には貿易商社がありました。貿易商社が兜町に移転した後は芥川龍之介ゆかりの耕牧舎、その後一八九五年（明治二八）から一八九九年（明治三二）にかけて立教中学の校舎と寄宿舎が建てられました。銀座方向から撮った立教中学の「六角塔」の写真が残っていて、当時の



解体新書を模した「蘭学の泉はここに」の碑

風景を見ることができます。このほかにも明石町には史跡旧跡が数多く、例えば文豪「芥川龍之介生誕の地」の碑や指紋研究で有名なヘンリー・フォールズの住居跡碑、さらにガス街灯や電信創業之地などの跡碑があります。

これらのことを考慮すると築地明石町は江戸時代の終わりから明治時代にかけて近代文明発祥の地であったといっても過言ではありません。ドイツ系の基督教宣教師であったトイスラーは、これらの歴史的な背景があり、ハイカラな異国情緒漂う明石町に着目して一九〇二年（明治三五）聖路加病院を開設しました。さらに一九二〇年（大正九）には、その附属学校である聖路加国際病院付属高等看護婦学校が設置されたのです。

（進藤 務）



聖路加国際病院付属高等看護婦学校・聖路加女子専門学校における 外国人教師による看護の授業はどのようなものでしたか。

ルドルフ・B・トイスラーは、レベルの高い看護教育機関を作るために、アリス・C・セントジョンを米国から招き、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校を開学しました（一九二〇年）。そして、学科課程、教育方法とも米国やカナダの看護婦学校に倣い、外国から先生方を招いて教育にあたりました。

開学当初、校長のセントジョンと副校長のドーンの二人で始まった学校は、専門学校への移行期に公衆衛生看護法のヌノ（Nuno, Christine M.）を迎え、一九三〇年代に入ると基礎看護を始め内科・外科・小児・産科等看護法及び助産、さらに看護婦学校養成管理法・同教授法を教授できる教員を揃えました。ピータース（Peterson, Augusta F.）、サリバン（Sullivan, Margaret E.）、バーバー（Barbour, Ruth）、ホワイト（White, Sarah G.）らがその先生方です。その他、英語や体操等の一般教養科目についても外国人非常勤教師が担当していました。

一九三〇年から一九三七年（昭五〜一二）の七年間は、看護科目担当の専任外

国人教師が五〜六名在職し、最も充実した時期でした。しかし、日中戦争下に入ると一人また一人と去り、一九四一年（昭和一六）三月二七日、セントジョンおよびヌノの二人の先生方の帰国を最後に外国人教師がいなくなりました。

聖路加女子専門学校を一九三九年（昭和一四）に卒業し、その後、ホワイト女史の助手を三年間務めた高橋百合子さんは、当時の状況を以下の様に話しています。

当時の外国人の先生方は、どなたも日本で看護教育をするという使命感に燃えていて、だから学生たちにも厳しい態度で接していました。先生と学生の関係は少数であったこともあり親密で、特に実技を伴うような学習（たとえば実習など）は、つらいけどよくわかる授業でした。英語で行われる授業には通訳がいましたが、すべてが逐次で通訳されるわけではなく最初は大変でした。科目によっては卒業生が通訳してくれました。

学生と一番長く接していたのは、ピータース先生でした。先生は看護学原理を担当され、実習も含めると週の三分の一くらいは一緒でした。先生は病棟実習もよく巡回されていました。長身を利用して、スクリーンのところから見下ろすようにして学生が行っていることを黙ってご覧になり、それから学生に注意をしていました。その当時は、注意されないためにはどうしたらよいかばかり考えていました。



当時のアツルームにおける実習風景



オウグスタ・F・ピータース

★マリオン・ドーン（一九〇〇〜一九二二在任）
★クリスチン・ヌノ・M（一九二五〜一九四〇在任）

★オウグスタ・F・ピータース（一九三〇〜一九三九在任）
★マーガレット・E・サリバン（一九三〇〜一九三五在任）
★ルス・バーバー（一九二二〜一九三八在任）
★サラ・G・ホワイト（一九三三〜一九四一在任）

が、先生は常に相手のことを不愉快にさせないようにするにはどうしたらよいか、患者、医師、その他のスタッフの方々との関係を考えながら接していたように思います。

校長であつたミセス・セントジョンは、とても威厳があり雲の上のような存在でした。ミセス・セントジョンをはじめ先生方はとても厳しく、一度言われたことに對し何回も注意を受けると、「Go home!」といわれるよう状況でした。物品は決められた場所に置くこと、約束を守ること、さらには歩き方まで注意され、廊下に先生の姿が見えると学生は、一人、二人と逃げるように隠れていました。当時のことを、楽しかったという人はいないかもしれませんが、今になればそのような教育も必要であつたかと思えます。日本人は物事を曖昧にして伝える傾向がありますが、外国の先生方ははっきり伝えていました。

教務主任であつたホワイ先生の手をしましたが、どんな時でも考えて行動すること、誰であつても（もちろん学生も）尊重して接することなどを行動で示して下さり、学生への教育的関わりの意味を教わりました。ホワイ先生は大きな体から声も高く、学生時代は近寄ることもできない方でしたが、愉快で、暖かく、優しい方でした。

学生時代には外国の先生方の徹底した厳しさを腹立たしく感じていましたが、社

会情勢が変わる時代（就職一年目は防空演習ばかりでした）に、異国の地で看護教育を担われた熱意、使命感、人間愛は、聖路加の看護の貴重な一ページになっていると思います。

戦後は、日本赤十字社看護養成所と合同でGHQ看護職員六名による教育も行われ（一九四六～一九五〇年）、一九四八年（昭和二三）にはホワイ女史が校長としてアメリカより着任されました。一九五四年（昭和二九）に聖路加短期大学として認可を受けたときにも、引続いてホワイ女史が学長を務め、一九五七年（昭和二三）の退職までその任を果たされました。

ルドルフ・B・トイスラー先生とアリス・セントジョン女史による看護教育への志は、多くの外国人教師とその教えを受けた先輩方によって、次の世代へと受け継がれてきているのではないのでしょうか。

（及川 郁子・高橋 百合子）

*GHQ看護職員六名

・エレナ・カールソン（一九四六～一九四八）
・ドロシー・ツーム（一九四六～一九五〇）
・A・トンブソン（一九四六～一九四七）
・ビリー・ハタター（一九四七～一九四九）
・ルイス・キングード（一九四八～一九四九）
・メリー・カワムラ（一九四六～一九四八）



聖路加看護大学は米国聖公会と関係が深いと聞きましたが、
どういふことですか。

聖路加看護大学と米国聖公会との関係は、例えて云えば親子の関係だと云うことができます。それは米国聖公会が本学と聖路加国際病院を含む聖路加メディカルセンターの生みの親であり、歴史的にも大変深い関係にあるからです。

聖路加病院での看護教育は、日本への米国聖公会の医療伝道の一貫で、米国聖公会の中国・日本での伝道活動の一環からはじまりました。ですから、米国聖公会の海外伝道活動がなければ、聖路加看護大学は存在しませんでした。

日本での宣教には医療伝道が必要であると宣教医を米国聖公会本部へ招聘したのは、一八五九年（安政六）にプロテスタント宣教師としては初めて長崎に派遣された、ウィリアムズ主教（Williams, Channing Moore）でした。彼は、三年間の中国と日本での多忙な伝道活動の後、一八六九年（明治二）には大阪で宣教活動を始めました。その後、一八七三年（明治六）一月に東京伝道のために上京し、築地居留地内に立教学校（後に立教大学）を創始しました。ウィリアムズ主教

の日本における宣教活動の基本的な考え方は、「日本国民に神の福音を宣べ伝えて教化する」、つまり、日本人に直接的に教え導くのは、日本人の牧師であり、その日本人牧師を育成することが海外から来た宣教者の活動の中心であると考えました。

当時、日本における米国聖公会の宣教の拠点は、一八七四年（明治七）二月に築地居留地に立てられた立教学校と、その後一八八二年（明治一五）に立てられた東京三一神学校でした。

また、ウィリアムズ主教は、日本において、学校教育のみならず、医療福祉事業の創まりとなる事業のためにも宣教医を米国聖公会本部に招聘しました。米国聖公会の日本における医療事業への貢献は、一八七四年（明治七）に宣教医ランニング（Launing, Henry）を大阪に、また一八八四年（明治一七）にハレルを築地外国人居留地に派遣し、その地において病院や診療所を開設したことです。そして、一八〇二年（明治三五）には、トイスラーによって聖路加病院が開設されました。この聖路加病院の土地は、もともと、ウィリアムズ主教が私財を投じて購入されたことが書き残されています。このように、聖路加国際病院や聖路加看護大学は、米国聖公会の海外伝道活動によって創められました。また、看護大学を含む病院建設や礼拝堂建設の資金の多くは、トイスラー院長や、関東大震災で崩壊した東京・横浜

*ランニング
今日の「聖路加病院」を開設。

YMCA会館復興のために来日し、後に、清里のキープ協会を創始したラッシュ(Rusch, Paul)氏が、米国の聖公会を中心として行った募金活動に寄せられたものでした。

一八八七年(明治二〇)には、英国教会や英国海外福音伝道協会とともに、日本聖公会が設立されました。現在、日本聖公会は、米国聖公会と共に、世界にあるアングリカン・コミニオン(Anglican Communion)のメンバーです。

トイスラー院長を派遣した米国聖公会の海外伝道の拠点チャーチ・ミッション・ハウス(Church Mission House)でした。このチャーチ・ミッション・ハウスは、長い歴史を重ねて、今日は、アングリカン・アンド・グローバル・リレーションズ(Anglican and Global Relations)として米国聖公会と世界の聖公会と関係を持ち、さらに、ウォーキング・トゥゲザー(Walking together)のプログラムとして世界で取り組んでいる二一世紀開発目標活動を進めています。

今でも、聖路加とアメリカン・カウンシルとの関係は継続しており、その活動の一貫として、聖路加看護大学とヴィラノバ大学(Villanova University)の間で、学部学生の交換留学プログラムが実施されています。

(田代 順子)

★キープ協会
キープ協会は、米国オハイル・ラッシュが第二次世界大戦で破壊した日本を再建するため、ハタケ山麓の農村をモデルに、酪農を中心とした高冷地農業を全国に広めるための協会で、清里に設立した協会です。その事業が、Kiyosato Educational Exceirment Project (清里教育実験計画)と改名したことが、KEEP(キープ)の由来です。

★ヴィラノバ大学
米国ペンシルバニア州にある一八四二年創立のカトリック系大学。看護学部を含む五学部の総合大学。



聖路加の校章・校歌はどんな経緯でつくられたのですか。

校章の制定

聖路加の校章は、一九四〇年(昭和一五)に制定されました。きっかけは、当時、学生が国家的行事に参加する際、どの学校なのか、他校の人には分からず、怪訝な顔をされた体験から、校章の必要性を強く感じたとのことでした。

七宝焼きの白を基調とした美しい校章は、当時の校長であった橋本寛敏先生がデザインしました。

楕円の形は種の形をあらわし、聖書のルカによる福音書第八章一一節にある「種は神のことばである」や、ヨハネによる福音書一二章二四節に書かれている「一粒の麦」を意味しています。それは、「一粒の麦が地に落ちて死ぬことにより豊かに実を結ぶようになる」というもので、良い種は何処にあっても芽を出し、根を生やし、花を咲かせ、結実するので、聖路加の学生も、何処に行ってもその場所で、看護の根を生やし、人々の健康のために働くようにという願いを表しています。



校章のバッジ

校章の中央には、青いランプが描かれた白抜きはく抜きの十字架が配され、周りに青地に黄色い小さな撫子なでこが描かれています。十字架は建学の精神であるキリストへの信仰、撫子は、当時入学が女子のみに限定されていたことから、日本女性を表す花として、学年の数と同じ四輪が描かれています。中央のランプは、マタイによる福音書五章一四〜一五節の「あなたがたは世の光である」という聖句と、ナイチンゲールがクリミア戦争において、夜も傷病者を一人ひとり見舞った時のランプと、彼女が灯した近代看護への灯火を表しています。現在でも校章はユニフォーム着用時、胸元中央に付けることになっており、聖路加看護大学の学生の証となっています。

校歌の制定

校章が制定された翌年の一九四一年（昭和一六）に校歌が制定されました。作詞は大本惇夫氏、作曲は山田耕柞氏です。

作詞の大本惇夫氏は、詩人・翻訳者・作詞家であり、当時多くの校歌を作詞しています。本学校歌の作詞依頼の経緯は定かではありませんが、作詞にあたり、大本惇夫氏自身が夏のある夕の集いに来校し、学生と共に過ごされたということです。詞の中に当時の学生たちの様子が浮かびます。

作曲者である山田耕柞氏は、「赤とんぼ」や「からたちの花」などの作曲で知られて

います。山田氏は東京本郷で医師でキリスト教伝道者の父の下に生まれ、幼少の一期、築地居留地六番館に住んでいました。また音楽家になってからも築地小劇場で音楽を担当するなど、築地と関わりのある作曲家だったようです。そして当時、聖路加女子専門学校で音楽の非常勤講師であった村井ます氏むらいますと、東京音楽学校（現東京芸術大学）で同窓であったことから、作曲が依頼されたものと思われます。

校歌が作られた当時の思い出を、「作詞・作曲共に、何て素晴らしい方達によって出来ているんだという驚きがあった」、「村井ます先生のもと、二度ほど練習した後、全校生徒がチャペルに集合して、直接山田先生のご指導を受けた。非常に熱心に歌い方その他について教えられた」、「有名な山田耕柞先生がチャペルで御指導くださって感激した」と同窓生は語っています。

しかし、戦時中に歌われたこの校歌は、戦後、日赤との合同教育時代には歌われることなく封印されてしまいます。校歌が再び日の目を見ることができたのは、聖路加短期大学が開設され、接収解除によって返還された、懐かしの築地校舎に全員が揃った時でした。この折、編詞をされた橋本寛敏先生は、制定時に歌われた軍色の歌詞を削除され、二節と三節を入れ替えられました。

聖路加看護大学校歌の変遷

(一九四一年)

一、白楊の緑すがしく
 學び舎は光みちたり
 いざ友よ集ひ励まん
 人の世に愛をもたらす
 いと聖き努に起つと

二、不盡が嶺の清きころに
 新しき科學の技を
 いざ友よ享けて繼がなん
 傷つける病める人等の
 慰めとならん

三、輝かし興垂の御稜威
 四方の民共に榮えよ
 いざ友よころみがかん
 大君の御旨かしこみ
 美しく烈しく生きん

四、大空に神は在して
 學び舎は愛にみちたり
 いざ友よ荆棘越えなん
 日の本のこ女われらぞ
 希望もて星を仰がん

(一九五四年)

一、白楊の緑すがしく 學び舎は
 光みちたり いざ友よ
 集いはげまん 人の世に
 愛をもたらす
 いと清き つとめに立つと

二、輝かし金の十字架みさとしは
 かしこにぞあり いざ友よ
 心みがかん 公に
 つかえまつりて
 美しく はげしく生きん

三、不二がねの清き心に 聖路加の
 ちえとわざとを いざ友よ
 うけてつがなん 傷つける
 病める人らの
 なぐさめと 力とならん

四、大空に神はいまして 學び舎は
 愛にみちたり いざ友よ
 いばらこえなん 日の本の
 こ女われらぞ
 望もて 星を仰がん

(二〇〇一年)

一、白楊の緑すがしく 學び舎は
 光みちたり いざ友よ
 集いはげまん 人の世に
 愛をもたらす
 いと清き つとめに立つと

二、輝かし金の十字架みさとしは
 かしこにぞあり いざ友よ
 心みがかん 世の人に
 この身ささげて
 美しく はげしく生きん

三、不二がねの清き心に 聖路加の
 ちえとわざとを いざ友よ
 うけてつがなん 傷つける
 病める人らの
 なぐさめと 力とならん

四、天地を造りたまいし 神を讃め
 愛に应えて いざ友よ
 試練にも耐え看とる人に
 優しき手を
 さしのべて 癒しを祈らん

その後、男子学生の入学が決まった二〇〇一年（平成一三）に日野原重明先生により再度編詞がされました。戦中・戦後から今日まで本学に深く関わってこられた日野原先生は、この校歌についての思いを次のように述べておられます。

「日本の軍部が、満州国を中国から独立させるなどの満州事変が起こったのは一九三一年（昭和六）であり、その頃の日本は東南アジアへの日本進出をもくろみ、天皇を中心とした国粹思想が国内に拡がっていました。この天皇制を軍隊が取り込む風潮から、第二節の詞が『公につかえまつりて』となっていました。この詞を新たに『世の人にこの身ささげて』に変えました。しかし、その後に続く『美しくはげしく生きん』は、橋本寛敏先生が特に愛された言葉なので原文のまま残しました。そして第四節は、二〇〇一年（平成一三）、本学の学則変更により、男子学生の入学が始まり、男女共学となったことから、「女子学生も男子学生も共に癒しへのケアに携わると言う表現に変えました」。

また、日野原先生は、校歌のメロディーについても、最初の一小節が、「この道はいつか来た道」の最初の一小節と同じ。＼＼長調で始まり、同じ和音が使われたことを、山田耕筈氏から、直接、伺ったことがあるそうです。

校歌の他にも、当時の同窓生の話しを総合すると一九四四年（昭和一九）頃より、入学式・卒業式、聖路加国際病院との合同の式典では、石山脩平氏作詞・阿部

正義氏作曲の「聖路加讃歌」が、そして卒業式には、立教女学院理事長であり、国語教師であった門間常次氏作詞の「卒業の歌」が歌われています（作曲者は不明）。このような歴史を持つ校章として校歌は今でも、そしてこれからも聖路加看護大学の使命そして理念を表す象徴として引き継がれていきます。

（安ヶ平 伸枝・渡部 尚子）



米国の看護教育を取り入れていた本学は、戦時中、どのような状況になりましたか。

一九四一年（昭和一六）七月、聖路加女子専門学校は、日中戦争下の厳しい国内新体制に即応するため、校名を興健女子専門学校と改称しました。その前年には、病院および学校運営に関わる外国籍の人々に対して政府からの干渉が始まり、聖路加女子学園においても二名の外国人理事の辞任、続いてセントジョン主事と公衆衛生看護学担当のヌノ氏がその職を辞し、日本を去りました（一九四一年（昭和一六）三月二七日）。興健女子専門学校は、学校の支柱ともいべき重要人物を失った中、日本人教師のみによる学校運営と、激動する社会への対応という大きな難題を抱えながら船出することになります。

この時期の状況について同窓会誌「会報」（一九四一年二月発行）は次の様に記述しています。「…（前略）…、昭和十二年日支事変起こりてより我国内外の情勢次第に変化し、昭和十五年に至り、我国民子女の教育は外国依存を排し、我国民自の手によって行わなければならぬとの輿論が盛んに成った。…（中略）…」。

然れども教育の精神に於いては我国本来の精神を発揚すべきは勿論である。殊に我国女性の美德は益々涵養せねばならぬ。また学術技能に関する教育法に於いても、我国状に最も適する道を執るべき秋は漸く到来した。依つて昭和十五年十月十一日学校行政に直接関与する職責を負うセントジョン女史其他は自発的に退職し有能なる卒業生に道を譲った(原文ママ)。また、学校の沿革については、発達過程を三期に分け、第一期を聖路加国際病院付属高等看護婦学校時代の胎児期、第二期を聖路加女子専門学校時代の外国依存の乳児期、そして第三期の興健女子専門学校は眞に我国状に適する教育を授くる学校として成長する時期だとその決意の程を述べています。興健女子専門学校の目的や校歌にも、『報国の精神に燃立ち』、『輝かし興亜の御稜威』、『大君の御旨かしこみ』など往時政府に阿る様な文言が見られます。また興健女子専門学校となる直前に学校報国団綱領や報国団旗も定められ、学校も教職員・学生も戦争状況に巻き込まれていきました。

興健女子専門学校は改称とともに学則の一部を改正し、修業年限四年の本科と修業年限二年の別科を付設しました。教授においては保健婦および中等教員免許取得の内容に加えて助産婦の教育内容も強化され、卒業生は看護婦・保健婦・中等学校教員免許(生理及び衛生)が無試験で付与される他、助産婦についても登録が可能となりました。しかし、四年間の教育も、大学等の修業年限短縮の省令によって

六か月短縮されるばかりか、日増しに悪化する戦況下で学生も救護の役割を与えられ、とても勉学に励む状況ではありませんでした。ただ、こうした状況においても、心の拠りどころであったチャペルでの朝礼拝は、出席できる学生と竹田牧師とともに慎ましく続けられたということです。

一九四三年(昭和一八)入学の今村節子さん(旧姓 宮内、一九四七卒)は、この当時の状況を次のように述べています。

日中戦争から太平洋戦争へと戦火拡大のなか、健民健兵運動や戦意高揚の掛け声が日増しに大きくなり、日常生活の言葉にも例えば学校の運動種目のバレーは排球、テニスは庭球等、敵国語廃止が勧められていました。

その頃、私の学校ではいち早く「保健」の授業科目が加わり、教師として聖路加女子専門学校卒業の方々が数人赴任してこられました。当時女教師といえは、高等師範学校か女学校専攻科卒業の方々が普通でしたから、初めて聞く校名に驚いたものでした。

一方、専ら良妻賢母教育を旨としてきた女学校教育のなかにも、女性の自立が眞剣に考え始められていました。

このような中で、私が選択し請求した聖路加女子専門学校の入学案内・願書の校

★大学等の修業年限短縮の省令
日中戦争の進展に伴い、国は国防および労働要員確保のため、一九四二年(昭和一七)に「国家総動員法」(一九三五年(昭和一〇)に「国民徴用令」を制定。しかし、戦局悪化に及び、一九四一年(昭和一六)一〇月一六日に「本学部ノ在学学生ハ大学科、高等学校高等科、専門学校若ハ実業学校ノ修業年限ハ当分ノ内天々六ヶ月以内之ヲ短縮スルコトヲ得」とした勅令を公布。これにより大学等の修業年限が一九四一年度には三か月、次年度からは六か月短縮。所謂「戦時下」繰り上げ卒業を実施。



戦時救護訓練

名は「興健女子専門学校」となっておりました。入学後のバッジにも「興健」の文字が刻まれていました。

入学に先立つ入寮にあたって、殊の他有難く感じたのは案内書に「寝具不要」とあったことです。当然必要と思っていたから不安でもありました。寮は一部屋二人、机・本棚・ベッド・クローゼットが合理的に整備されていました。

授業開始にあたっては、専門科目の多さに驚いたり、珍しさに胸躍らせたり、日々充実感、学べる希望がありました。唯、参考書が得られず、神田の古書店のことを聞いて、何回か通い、岩波文庫の「解剖生理」を手にした喜びは忘れられませんでした。各実習の充実・徹底さも驚きでした。特に「基礎看護実習」は見たこともなかった実習室、物品の整備、時には無駄では？と反発を覚えることもありましたが、あの訓練の意義は理解しよう、感じ取ろうとする者にこそ得られる言語表現を超えたものであり、単にテクニック（技術）ではなく、アート（芸術）への探究を示唆するものであったと思います。

疾病や看護に関する専門科目に先立つて教えられた「個人衛生」は、日常生活習慣に関する事項が大部分で、小学校入学時を想起させる内容でさえありました。が、例えば姿勢歩き方等について、人体の解剖・生理学的根拠に基づく「正しさ」の理解から、具体的行動表現を体得し、結果の美しさを評価・確認する。即ち好ま

しい行為を自覚し習慣化することが目標となっていました。

入学から約半年後、冷たい雨の中、明治神宮外苑に学徒出陣を見送る女子学生集団の列に加わったことも忘れられません。

以後、体育の時間は担架訓練・患者搬送法等に代わり、戦局激化の中、短期間ながら軍需工場にも行きましたが、本土空襲が始まり、病院へ被災者が搬送されるようになって、学生は臨床実習場と同一場所の看護を担うことになりました。

昼夜をわかない空襲警報発令の中、着のみ着のまま過ごす日々が多くなりました。たまたま分娩室実習中、灯火管制下で初産の方の分娩介助をすることになりました。日頃技術の立派で、美しさが評判の助産師の指導で、緊張と胸の高鳴りを覚えながら、無事終了できた時の安堵感を今も鮮明に思い出します。

一九四五年（昭和二〇）三月一〇日の東京大空襲の夜以降は、チャペルからロビーへと急造ベットが並び被災者の看護に当たりました。

やがて終戦を迎え、九月二十四日までに学校は全施設を米軍に開放することになり、学生は自宅待機となりました。

約半年後、授業再開の通知を受けて帰校。東京都保健所の仮校舎から日本赤十字本社へと移転し、私共は仮進級の四年生となり、正規の授業が開始されることとな

* 学徒出陣
昭和十八年一〇月二日、国より在学徴集延期臨時特例の勅令、文科系学生（大学・高等学校・専門学校）の徴兵猶予の停止以降、全国各地で出陣学徒の壮行会盛んとなる。明治神宮外苑競技場での壮行会は、同年一〇月二一日雨天の中挙行。東京近郊七七校が参加、六万五千人の民衆が学徒行進を見守ったと言われる。

りました。戦後の混沌とした中で未来へ向かって活躍する自覚を新たにしました。

一九四六年（昭和二一）六月、GHQの指導の下、聖路加女子専門学校と日本赤十字救護看護婦養成部は東京看護教育模範看護学院となりました。

戦中から戦後へと国家の有り様は一八〇度の転換をする中、私たちが受けた学校教育は一貫しておりました。戦中・戦後、非常時・平時どんな時代でもどんな事態になろうとも「看護」の必要がある限り、学びもそこにある。「看護」とはそのようなものであることを体得しました。それを買っていたものは教育の不易と流行の堅持。不易とは学びの基礎基本となる不変なもの、流行とは臨機応変に変化順応させるものです。それは理論と実習という授業形態から取得した成果であろうかと思えます。

正に激動のなかで過ごした四年間の学校生活でしたが、その後の私の職業生活においては言うまでも無く、人生のバックボーンとなって今日までできているといえます。

（渡部 尚子・今村 節子）



終戦直後、聖路加は米国に接収された時、病院や学校はどうなったのですか。

一九四五年（昭和二〇）八月二五日、第二次世界大戦が終結しました。それからまもなく、九月には、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校の建物は、GHQにより接収され、米国陸軍第八軍第四二病院となりました。病院は、当時明石町にあった都立整形外科病院を借り受け、同年一月には聖路加診療所を開設して診療を開始しました。病床数二五床と小規模ながらも、あらゆる病院機能を持ったモデル病院とされ、全国の病院管理の先駆的存在となりました。

教育施設としての建物を失った聖路加女子専門学校は当面休校となり、学校側の指示により学生たちは郷里に帰りました。しかしその年（一九四五年）の一〇月には、臨接する中央保健所の一部を教室として借り受け、授業を再開しています。学生の宿舎として、当時、明石町にあった松屋従業員宿舎を借り受け、宿舎に入らない学生は自宅、あるいは知り合いの家から通学していました。

一九四六年（昭和二一）六月、聖路加女子専門学校は、当時、渋谷区宮代町に



GHQ接収時の米国旗が翻る聖路加国際病院
（当時：米国陸軍第八軍第42病院）

あった日本赤十字中央病院内に場所を移し、日本赤十字社救護看護婦養成部との合同教育を開始します。この機関は東京看護教育模範学院と呼ばれ、GHQの発案および指導によって設置されましたが、戦後の新しいカリキュラムを試行する場として、また看護学校の模範（モデルスクール）としての目的と役割がありました。東京看護教育模範学院としての教育は、一九五三年（昭和二八）七月まで続きました。

一九五三年（昭和二八）二月、聖路加国際病院の一部（木造の旧館建物）が接收を解除されて返還されました。病院は、早速、一四〇床を擁する施設として改修工事に取り掛かり、徐々に病院本来の業務を取り戻しはじめました。

一方、渋谷宮代町の日本赤十字社中央病院にいた学生も築地に戻り、改修された木造教室で授業を受けるようになりました。

それから三年後の一九五六年（昭和三一）、約一年の年月を経てようやく、聖路加国際病院と聖路加女子専門学校のすべての建物が返還されました。

（麻原 きよみ・内田 卿子）



戦後日本の看護改革において
聖路加の多くの卒業生が貢献したといわれていますが、
具体的にはどのようなことですか。

第二次世界大戦後の日本は、敗戦国として連合国軍に占領され、GHQの指導の下に戦後復興にあたることになりました。国民は戦禍で疲弊し、食物も十分ではなく、衛生状態もよくありませんでした。国民の保健衛生状況を改善するために早急に医療のしくみを整える必要がありました。そのひとつが看護改革でした。この改革には、聖路加で教育を受けた多くの先輩が貢献をしました。

看護改革は、看護関連法規を整え法規に基づいた看護行政を行うこと、看護教育のリーダーを育成し、新制度のもとに始められた専門学校教育の充実をはかり、より高い水準の看護を普及すること、改革以前に教育を受けた看護職者の再教育を行うことなどでした。やがて、日本でも看護の大学教育が行われることになりました。

戦後、聖路加女子専門学校は、GHQの接收により築地の校舎を追われて困難な

局面にありました。当時、G H Q看護課長にあったオルト大尉(Grace Elizabeth Alt)は、米国聖公会のミッションにより建てられた日本で唯一の看護専門学校を何とか発展させたいと考え、一九四六年(昭和二一)、聖路加女子専門学校と日本赤十字社看護看護婦養成部とを合同させ、新たに東京看護教育模範学院として、日本の看護改革の担い手となる看護教育者リーダーの養成に着手しました。

この模範学院時代の教員として活躍した卒業生には、湯橋ます、前田アヤ、高橋シユン、白井怜子、檜垣マサ、吉田時子などがありました。同じ目的で一九四八年(昭和二三)開設された国立岡山病院附属高等看護学院では、看護教育者として聖路加から間宮秀子、小室規矩子、白井怜子、中野輝子らが赴任しました。これら看護教育のリーダーを養成する学校からは、その期待通り次代の看護のリーダーが数多く輩出されました。また、新制度による看護教育機関には、多くの卒業生が責任者として就任しました。

一九四六年(昭和二一)一月には、それ迄、別々の団体として存在していた三つの看護職能団体が発展的に解消して日本産婆看護婦保健婦協会が設立され、一九五一年(昭和二六)には現在の日本看護協会に改名されました。この職能団体の創立当時に活躍した役員には、河村郁、湯橋ます、金子光、平井雅恵らの名が記されています。

一九四八年(昭和二三)には保健婦助産婦看護婦法が制定されました。三年後の一九五一年(昭和二六)にはその一部が改正され、改正に当たって看護制度審議会が設置されました。聖路加からは橋本寛敏聖路加国際病院長、湯橋ます、平井雅恵、三浦貞、小柳こと、金子光らが委員として活躍しました。さらに、法規に基づいた保健婦助産婦看護婦国家試験のための審議会が設置され、このメンバーに平井雅恵、中道千鶴子、湯本きみ、河村郁、金子光、前田アヤ、小柳こと、高橋百合子らがなっています。

保健看護法の制定により、一九四八年(昭和二三)には厚生省医務局に看護課が新設されました。戦前より厚生省に在職していた金子光は三代目看護課長として看護行政を担い(一九五〇～一九六〇年)、その後、東京大学助教授、衆議院議員等(一九七二～一九九〇年)を歴任し、看護制度改革に貢献しました。

看護制度改革の一環として、一九四六年(昭和二一)、新制度以前に教育された保健婦助産婦看護婦の再教育が看護課と看護協会の共催で実施されていきました。現職看護婦のための看護教育指導者講習会委員には湯本きみ、平井雅恵、金子光らの卒業生が就任し、リフレッシュコースとしての新しい看護の教育は、これら委員のほか湯橋ます、高橋シユンらが担当しました。また、保健婦の教育に関する厚生省主催の協議会には卒業生の三浦貞、中道千鶴子、渡邊モトエ、橋本秀子[＊]が出席し

＊オルト
G H Q公衆衛生福祉局看護課初代課長。

＊模範学院時代の教員
・湯橋ます(一九二四年卒、聖路加女子専門学校主事)
・前田アヤ(一九三〇年卒)

・高橋シユン(一九三五年卒)
・細貝(白井)怜子(一九四一年卒)
・檜垣マサ(一九四二年卒)
・吉田時子(一九四二年卒)
雑誌「看護教育」三巻四号、三二頁参照。

＊同じ目的
さらに同じ目的で国立東京第一病院附属の看護婦学校も看護教育のモデルスクールとなった。

＊国立岡山病院附属高等看護学院
・神・間宮 秀子(一九三四年卒)
・小野 小窓 規矩子(一九四五年卒)
・三近(中野)輝子(一九四七年卒)

金子光著「初期の看護行政―看護の灯たかくかげて」一九九一、五頁参照。ライター
易陽玲子、大杉杉子編著(二〇〇三)、戦後日本の看護改革、九〇頁参照。

＊職能団体の創立当時に活躍した役員
・河村郁(一九三三年卒)
・金子光(一九三五年卒)
・平井雅恵(一九三五年卒)
日本看護協会編「日本看護協会史」一九五七(昭和二三)参照。

＊看護制度審議会

・永野(三浦)貞(一九三三年卒)
・小柳こと(一九三四年卒)
日本看護協会編「日本看護協会史」一九四六(昭和二一)～一九五七(昭和二三)二七〇頁参照。

＊保健婦助産婦看護婦国家試験のための審議会
・中道千鶴子(一九三六年卒)
・湯本きみ(一九三八年卒)

・高橋百合子(一九三九年卒)
金子光著「初期の看護行政―看護の灯たかくかげて」一九九一、二二頁参照。

＊金子光

初代看護課長は、一九四八年七月一五～三〇日までの一六日間、医務課長高田浩運が兼任し、保健婦助産婦看護婦法が公布された翌日の七月三十一日より代目保険せきが看護課長に就任。金子光は元目である。

＊一九五〇～一九六〇年
一九五六年三月三日厚生省は看護課を廃止し医事課に統合。一九六三年四月一日より看護課が復活したため、金子は一九五〇～一九五六年看護課長、一九五七～一九六〇年看護参事官として務め、一九六〇～一九六二年は永野貞が看護参事官となり、その後看護課長として一九七〇年まで務めた。

＊一九七二～一九九〇年
この間、日本看護協会会長、ICN教育委員、WHO看護専門委員会等を歴任。

ており、岡田菊枝、中道千鶴子、永野貞は、保健婦のテキストの執筆や再教育に携わりました。

G H Qの公衆衛生強化指導により一九四七年（昭和二三）には新しい保健所法が制定され、各都道府県に一カ所ずつ模範保健所がつくられました。このため模範保健所のモデル保健所として東京都杉並保健所を整備することになりました。モデル保健所運営に先立ち、G H Qの指示で衛生部長や保健所長への保健婦活動のデモンストレーションを行ったのは、平井雅恵、前田アヤ、小林富美栄、金子光でした。

また、戦後の社会経済混乱期にあつて、食糧増産と引揚者、戦災者、復員軍人らの失業対策は緊急に進めるべきことがらでした。その一環として、一九四七年（昭和二三）から制度化された開拓保健婦設置事業がありました。初期には、開拓という重労働に見合う栄養補給や生活環境の整備、応急手当が必要でした。農林省農地局入植営農課で保健婦の立場で活躍したのが崎川サ子でした。戦前より東京都渋谷保健所婦長として着任していた渡邊モトエは、保健婦の職位の向上にも貢献しました。

一九五二年（昭和二七）には高知県立女子大学家政学部衛生看護学科が誕生し、翌一九五三年（昭和二八）には東京大学医学部衛生看護学科が設置されました。我が国初のこの国立四年制看護大学の創設期看護教員には、湯楨ます、中道千

鶴子、宮内節子、木下安子、宮島昌子、橋本秀子、飯田澄美子らが活躍しました。

こうして、聖路加の看護教育を受けた先輩たちは、G H Q看護課とともに看護政策、教育、実践のすべてにおいて戦後日本の看護を「新しい看護」へと生まれ変わらせるための種まきをしました。わが国看護界の歴史に残るこの戦後看護改革に、これ程まで多くの聖路加出身者が係ることができたのは、おそらく大学卒業に相当する唯一の看護専門学校で教育を受けていること、またそれは、当時最も進んだ米・カナダの教育内容であったこと、そして看護婦は云うまでもなく保健婦・助産婦・学校教員等、多くの看護分野に通用する資格を有していたこと等の理由によるものだと思われます。これらのはたらきにより、本学は看護教育の最高峰と位置づけられ今日に至っています。

姓名表記上の留意点

活躍当時のものと思われる資料上に表記されている名前を本文中に記し、氏名初出の脚注には「姓（旧姓）名」の順で記しました。

（松谷 美和子・飯田 澄美子）

*看護制度改革

金子光の著書『看護の灯高く掲げて』は、看護行政と看護教育の中枢に身を置き、一七年に及ぶ国会活動を通して看護界と関わり続けた六〇余年の振り返りであり、二一世紀の日本の看護を考える上での貴重な資料である。

*現職看護婦のための看護教育指導者講習会委員

日本看護協会編、日本看護協会史、一九四六（昭和二一）～一九五七（昭和三二）二四〇頁参照。

*橋本秀子（一九四一年卒、当時埼玉県浦和保健所婦長）

*岡田菊枝、中道千鶴子、永野貞は、保健婦のテキストの執筆や再教育に携わりました。

*岡田（清志）菊枝（一九三四年卒。金子光著「初期の看護行政―看護の灯たかくかくげ」（一九九二）一〇二頁参照。

*新しい保健所法が制定

平成六年より地域保健法に改題。

*保健婦活動のデモンストレーション
・小林富美栄（一九四一年卒、当時厚生省保健課技官）。

*農林省農地局入植営農課

・崎川（小野寺）サ子（一九四四年卒）

厚生省健康政策局計画課監修、ふみしめて五十年：保健婦活動の歴史、（財）日本公衆衛生協会、（一九九三）、三三八頁。

*東京都渋谷保健所婦長

渡邊（杉野）モトエ（一九三〇年卒、当時渋谷保健所保健婦長、元・藤田学園名古屋保健衛生大学衛生看護学科長）。

*保健婦の職位の向上

厚生省健康政策局計画課監修、ふみしめて五十年：保健婦活動の歴史、（財）日本公衆衛生協会、（一九九三）、三四二頁。

*国立四年制看護大学の創設期看護教員

・今村（宮内）節子（一九四七年卒）
・木下（亀田）安子（一九四八年卒）
・馬場（宮島）昌子（一九五三年卒）

・飯田（戸次）澄美子（一九五一年卒）

厚生省健康政策局計画課監修、ふみしめて五十年：保健婦活動の歴史、（財）日本公衆衛生協会、（一九九三）、三三八頁。



東京看護教育模範学院の名のもとに
聖路加と日本赤十字社が合同して看護教育を行ったと聞いています。
その時の様子を教えてください。

東京看護教育模範学院（以下「模範学院」）がスタートしたのは、太平洋戦争で日本が敗戦国となった翌年の一九四六年（昭和二十一年）のことです。当時は占領軍であるGHQがリーダーシップをとり、日本の劣悪な公衆衛生の状況を改善するため政策を展開していました。その改革プログラムの一つとして、GHQの公衆衛生福祉局看護課の指導のもと、看護教育改革が図られていきます。担当した看護課長はオルト大尉、日本側は厚生省で保健婦行政に携わっていた金子光氏（一九三五年卒）が中心になって対応することになったのです。

当時の看護教育は、今のように国が定めた教育課程はなく、さまざまな教育を経て、国家試験もなく看護婦や保健婦・産婆（助産婦）になっており、専門性も低い状況でした。そうしたなか、聖路加女子専門学校だけは、戦前よりトイスラー博士、セントジョン女史により米国式の近代的な看護教育が行われており、当時、国内で唯一文部省から認可された看護の専門学校でありました。

GHQは、金子光氏とともに日本の医療事情を視察し、看護婦の仕事は、掃除や洗濯などではなく、ベッドサイドでの患者の世話に責任持つことであると、広く理解してもらうことが必要であると考え、看護婦養成の充実を検討しました。ところが、その推進の協力相手と考えていた聖路加女子専門学校は、米軍に校舎を接收され、学び舎を失っている状況にありました。そこで、戦後日本の看護を担う人材を育成するための学校は、聖路加女子専門学校と日本赤十字社救護看護婦養成部を合同して展開するという計画がたてられました。日赤は、聖路加女子専門学校と同じ資格を得るために急遽文部省に申請し、日本赤十字女子専門学校となった後に合同したのです。聖路加女子専門学校は、宿舍及び教室を宮代町（現在も日赤がある渋谷の地）に移し、日本における看護教育のモデルスクールとしてスタートします。現在の三年制看護基礎教育の基礎が築かれたのです。

米国式の個人を尊重する教育とキリスト教精神をバックボーンとした、リベラルな校風をもつ聖路加と、軍隊式に厳しく階級が分けられた組織で、看護学生も病院職員として働くことが期待されていた日赤の全く異なる文化をもつ二つの学校が、一つ屋根の下に学ぶということは容易ではなかったようです。日赤では学生実習は病院の労働力として扱われ、学生に一人夜勤も課していましたが、このような考えは聖路加の教育にはなく、一つの象徴的なエピソードとして語られています。



東京看護教育模範学院の先生たち

合同の話が出された僅か一カ月後に教育が開始されたことは驚愕に値します。模範学院は、八年間という短い期間に、数回にわたりカリキュラムを変更しています。中でも特徴的なのは、看護基礎教育のカリキュラムでありながら、環境衛生、産業衛生、学校衛生、個人衛生、公衆衛生学、公衆衛生看護といった科目が充実しており、当時から先輩たちは、病院中心の看護だけではなく、地域住民のための看護を教わっていたことを確認することができます。

両校の合同は、教育内容についての合同であって、組織は別法人で予算も別だったことも興味深いところです。東京看護教育模範学院時代に三八九名が卒業しておりますが、卒業証書は、聖路加、日赤それぞれのものと、模範学院のもの二枚が授与されています。

聖路加国際病院の接収が解かれると、さまざまな思い出のある東京看護教育模範学院の歴史も終わりを告げます。この模範学院時代に米国からの多大な支援を受けながらわが国の看護教育の近代化の一步が幕を開けたことは確かなようです。

(山田雅子・岩間節子)



学生寮があったと聞きました。寮生活はどのような様子でしたか。
また、現在の学生行事は何時からあったのですか。
それに纏^まわるエピソードがありますか。

学生寮について

学生寮は、本学の前身である聖路加国際病院付属高等看護婦学校の創立とともに作られました。寮生活についてある卒業生は「まるで修道院のような管理された生活」と話していました。朝五時四五分に起床し、洗面・部屋の掃除の後ユニフォームに着替え、朝食を摂って六時四五分からの朝の礼拝を終えると、そのまま病院で入院患者のAMケア(洗面、歯磨きなどの介助)を行うことから一日が始まります。AMケアでは一学生あたり二名の患者を受け持っていました。その後、学校に戻って講義を受けます。講義中は、あまりの忙しさに眠たくなってしまふ学生もちらほら…。そして、夕方にもPMケアを行います。一九時からは舎監の先生を交えての夕の礼拝、二一時半の消灯まで自習時間という日課でしたが、この時間だけでは講義や実習に備えた学習が終わらず、消灯後に光が漏れないようにドアの下に新聞などを差し込んで、舎監の先生の目をごまかす(盗電といっていました)と

*AMケア (AM Care)
入院している患者の朝の世話のこと。患者さんの状況にあわせて、洗面の介助をしたり、窓をあけ、換気をし、ヘッドメイキングなど朝の環境を整えるケア。

*PMケア (PM Care)
入院している患者の洗面の介助や、掛け物を整え眠るための環境を整えるケア。

いう技を使っていた学生もいました。インスペクションと呼ばれた各部屋のチェック（整理整頓、ベッドメイキングや清掃状態）を教員と舎監の先生が毎週月曜日に行い、時には厳しいご注意、時にはお褒めの言葉をメモに書かれていました。寮生活での時間厳守・環境整備・個人衛生といったことが看護教育の一環として考えられていたともいえるでしょう。

寮での人間関係について見ていきましょう。先輩たちは後輩の面倒をよく見ました。入寮の日、新入生の勉強机に小花を飾り、ウェルカムメッセージのカードを贈るのは直上階に住む二年生の役割でした。新入生は、初めて見る洋式トイレや肩肘机、ベッドにカルチャーショックを受けることもありましたが、そんなときも上級生がやさしくフォローをしました。

このような厳しい生活を送っていくうちに、次第に時間の使い方がうまくなり、学業だけでなく、遊ぶ時間も作れるようになりました。寮の門限は一九時半でしたが、あらかじめ届出しておいた出先のお宅の印鑑をもらえば、二一時まで門限が延長されました。ただし、これも月二回まででありました。また、音楽会などに限り二一時三〇分までの外出が認められました。このような寮生活を一緒に送ってきた仲間とは、それこそ苦楽を共にし、同じお釜のご飯を食べた仲間として篤い友情で結ばれ、卒業後もずっと交友関係は続いています。

しかしこうした学生寮も、大学になってから、次第に全寮制への疑問や日常生活の様々な規則に対する不満が大きくなり、やがて一九七六年（昭和五一）には、全面的に廃止になりました。

学内行事について

*白楊祭

白楊祭は、学生自治会が主催して行う大学祭です。一九七七年（昭和五二）に「白楊祭」とネーミングされ、今年（二〇〇九年）で四八回目を迎えました。各部活動、サークルの発表や外部からの講演を主催するなど、現在もなお学生自治会が主体となって運営を続けています。

*体育デー

体育デーは、学生がとても楽しみにしている学内行事の一つです。以前、大学での体育の時間は、校舎の地下一階にある狭い部屋で行っていましたが、決して満足できる状況ではありませんでした。一九七六年（昭和五一）から学生全員が学年対抗球技試合に参加できるように半日の体育の時間を設けたことがきっかけで、一九七八年（昭和五三）からは体育デーとして、中央区の体育館を一日借りて、全学生、教職員が参加し、学年対抗戦で競技を行う今のスタイルになりました。この日



体育デーでのひとこま



白楊祭、お点前が終わって記念撮影の茶道部

は一年のうちでもっとも学生が熱く燃え、結束力の高まる一日といってもよいでしょう。各学年は決められた色で作ったおそろいのＴシャツを着て、体育デーに臨みます。以前、綱引きにおいて、明石小学校から借りた綱が競技中に切れてしまい、その後大学が購入したというエピソードもありました。体育デーは学生と教職員の委員が運営しており、委員は黒のＴシャツを着るといふ決まりがあります。二〇〇九年（平成二一）には、体育デー委員に初めて男子学生が入りました。また、同窓会から、体育デー委員会に「功労賞」の金一封が贈られるようにもなりました。

*クリスマスの集い

全寮制の時代は、クリスマス礼拝とクリスマスのタベの集いが必ず行われていましたが、寮生活が廃止されてからこの行事が一時なくなりました。しかし、一九七五年（昭和五〇）から大学として「クリスマスの集い」が再スタートしました。学生自治会とチャペルアワー委員が中心となって運営しています。クリスマスの集いは二部構成で、一部が礼拝、二部が茶話会と各学年や有志の出し物を行います。教職員も出し物します。最後には日野原理事長の指揮のもと、ハレルヤコーラスを全員で大合唱します。笑いあり、涙ありの素敵な集いです。

（菅間 真美・大熊 恵子・有富 洋子）



聖路加看護大学と聖路加国際病院との関係を教えてください。

病院と大学の創立者、トイスラー博士は日本の医療には、医師と協力して働くことができるレベルの高い看護婦の養成が必要であると確信し、一九二〇年（大正九）、入学資格を高等女学校卒業生とする、修業年限三年の聖路加国際病院付属高等看護婦学校を開校しました。本学のルーツは病院附属の看護婦学校から出発したのです。

当初トイスラー博士が聖路加病院を設置した際に描いていたのは単なる病院ではなく、医療、公衆衛生、看護婦養成の大きな三本柱を包括する聖路加メディカルセンター構想でした。聖路加病院での医療と地域の公衆衛生に関する社会的活動、看護婦養成教育を有機的に行うことが病院設立の目的だったのです。一九九六年（平成八）に現在の新校舎が完成するまで病院と大学とは棟続きの建物でしたし、組織は別でも病院は実習で学生を受け入れる、病院医師が非常勤講師として専門科目の授業を担当するなど、また、ボイラーやエレベーターなど施設設備管理面でも病院

の支援はとても大きなものでありました。

戦後制定された学校教育法で、学校法人のみが私立学校を設置できると定められたため「学校法人聖路加看護学園」が設立され、財団法人である病院と学校は異なった法人組織でそれぞれ医療、教育研究を行うこととなりました。一九六四年（昭和三九）大学昇格の際に大学設置基準を満たすためには一定の校地が必要であるということから現在の聖路加ガーデンなどの病院所有地を無償貸与してもらい、そのおかげで大学昇格が実現しました。

また、現在の本学校舎は一九九六年（平成八）、聖路加再開発事業の中、大学独自で建築費を捻出することはとても難しい状況でしたが、聖路加国際病院の絶大な支援を受けて竣工しました。これらのことを勘案すると聖路加国際病院と聖路加看護大学の共同体意識がなければ大学の今日の発展はなかったといっても過言ではありません。

現在、法人としてはそれぞれ独立した個別の法人ですが、聖路加国際病院と聖路加看護大学とは聖路加コミュニティとして密接な関係を保っています。学校法人聖路加看護学園の役職上の理事として聖路加国際病院の院長が任命され、評議員も病院職員からの選出枠が明記されています。また、反対に病院の理事会や評議員会に本学の学長などが加わっています。さらに、院長、看護部長（副院長）、チャプレン

が兼任教授として任命され、教授会のメンバーにもなっています。

他に大学図書館と病院の医学図書館との相互利用も図られ、学生食堂の給食サービスも大学単独では採算が取れないため、病院の職員食堂に委託しています。また、大学の施設全般を管理する中央監視盤は病院の防災センターとリンクしており、冷暖房は病院の地下に作られた地域冷暖房システムから供給されているなど施設設備の面においても病院と大学とは緊密な連携が保たれているのです。

（山口 喜義・進藤 務）



聖路加の卒業生は、よいナースでよいお嫁さんになれると言われていたそうですが、本当ですか。

最近二つの記事に接し、手元にあった本を思い出しました。一つは「イギリスパブリックスクール、イートン校の話題」という記事から思い出した『自由と規律』（池田潔著、一九四二年）という本です。その本は自由な精神が厳格な規律の学校生活で育まれる様子を生き生きと描いています。もう一つは上坂冬子さんの訃報の記事から彼女の著書『教育の忘れ物―東京の学生寮・和敬塾』（二〇〇六年）です。和敬塾の存在を知らなかった上坂氏は、執筆に当たり数人の卒業生を訪ねエピソードを取材し、それは正に「教育の忘れものであった」と述べています。イートン校は、一四四〇年設立の人間形成を教育の基盤とする全寮制の伝統校で、イギリスの若き王子たちも学んだ学校です。片や和敬塾は四年制大学に学ぶ学生の「学生寮」として一九五〇年（昭和二五）に創設、こちらも人間形成を主体としたものでした。これら両者は、いずれも多くの逸材を世に輩出して今も脈々と続いているのです。二冊を読み返して、自分の過ごした寮生活―当時は寄宿舎と言っていました

―にも相通じるものを感じ、大変懐かしく思い出しました。残念ながら聖路加は寮制度が廃止されてしまいましたが、和敬塾の卒業生が体験した思わず顔をほころばせる様な学生寮でのエピソードが、私の学生時代にも数えきれない程ありました。

全寮制、そこは専門職としての「看護」を学ぶ場で、また女子だけということもあり厳しいものがありません。後に理解することとなりますが、ナイチンゲールの標榜した「学校は家でなければならぬ、それは倫理的及び実践的訓練の場であり、知識を身につけると同時に、品性、知性の鍛練の場でなければならぬ。」という意味合いのものであったでしょう。勿論、それは創設者の理念でもありませんから、寮生活そのものが学びであり「寮」とも言つべきものでした。

患者中心（Patient-Centered）の看護とは何かを学び実習を重ねて専門知識を得、その理念に基づいた寮生活の中で、同じ場で起居を共にする先生方と舎監より、品格と知性の鍛練として「寮」を受けたのです。それは「指導」などというものではなく、まさに「しつけ」という言葉が的確だと私は思っています。「寮」、何と単純明快な字ではありませんか。今となつては、「ウッソウ!!」と一笑にふされそうな小さなことまでいろいろとありました。「自主性ばかり重んじて教えない教師が多すぎる」と言われますが、親でさえも寮を放棄している昨今、私達は宝物のような教育を受けたのかもしれない。まさに「教育の忘れもの」を。朝五時四五



学生寮の室内



学生寮内、洗濯場

分起床、夜九時半就床といった時間的制約などそれぞれ“シンジラナイ!!”でしょう。また、毎週月曜の朝のインスパクションの厳しかったこと！ そのお陰で“お片付け”も上手になりました。

授業は、教養主義と言われるパブリックスクールではありませんが、専門科目の傍ら、教養科目も充実していました。特に印象に残っているのが、「話法」、「英会話」、そして「個人衛生」のクラスでした。人前で「話三分で話す」「話法」の授業は、社会人となって大いに役立ちました。ネイティブのミセスから教わった「英会話」も楽しいものでした。旅先で「コミュニケーション」が図れ、旅を倍に楽しめるのもこの授業に原点があります。「個人衛生」という授業も耳新しく、私達の間で流行語になりましたが、新型インフルエンザに席卷されそうな昨今、大いに使いたい言葉ですね。「個人衛生」がよくなって体調を悪くしたときは、アイソレーション^①なる部屋に隔離され、食事やその他のこと全てを先生方がケアして下さいました。大事にされていることを実感する体験でした。

クラブ活動も幾つかあり、私が所属したのは「ダンス部」、これはソーシャルダンスです。地下の「体育場」と称する所で毎週一回、YWCAからいらした先生にレッスンを受けました。ダンスパーティー盛んなその頃、年一回、私達もパーティーを開催したものでした。この時ばかりは男性解禁。但し、先生方も参加され、片隅

で眼光鋭く眼を配っていて、ちょっと他校にはない異様な(?)雰囲気の中でまど男^②性を眺めるのも一興でした。

また、海外生活の経験のある先生方でしたから、寮生活や行事の中に洋風な習慣がありました。それらしきことの一つに、お茶のサービスがあります。テーブルには真っ白いシートが掛けられ、大きなサモワールから先生の手で紅茶が注がれ、一人一人並んで受け取るのです。カップ＆ソーサーですよ！ ペットボトルと紙コップではありません。何とも言えない優雅な雰囲気で、ちょっと気取って至福の時を過ごしたものでした。

こんなこともありました。実習室をアートルームと呼んでいましたが、特別の来訪者がある時などここを使いました。病院に入院されていた山田耕柞ご夫妻とその作品を合唱したり、三笠宮様とフォークダンスをご一緒したり・・・。

私が受験のため初めて聖路加を訪れたとき、玄関への数段の石段を登り、二つのドアを開けて入ったその空間は、神が在しますのか、何と厳かでエキゾチックな空気が流れていたことでしょう。規律と使命に満ちた空気、それは不思議な感覚でした。

そしてそこに行き交う上級生の毅然として楚々とした姿、聖路加の学生が“容姿端麗”と言われることも頷けます。それはとりもなおさず聖路加教育の賜ではな

かったでしょうか。私たちは、先に述べたように厳しい躰を受けましたが、そのことは「没個性」でも「型」にはめられていることもなく、学びのうちにその「型」を使いこなし、様々な個性や表現となっていたのです。感じる力があれば必ずそれは磨かれ身に備わって行くものなのです。

このような環境と状況の中で学びを得た私達、果たして「よいナース」そして「よいお嫁さん」になれたでしょうか。如何でしょうか。

教育再生の叫ばれている現在、厳しい規律の中で育まれる自由の精神、このような「教育の忘れもの」が見直されてもよいのではないのでしょうか。

（千葉千栄子）



短期大学と大学の教育で何が一番かわりましたか。

一九五四年（昭和二九）に、戦後の新制度によって設置された聖路加短期大学は、一〇年後の一九六四年（昭和三九）には聖路加看護大学に改組され、日本初の私立大学における看護学部となりました。改組の趣旨は、短期大学三年に加えた一年の専攻科では教育が分断されるため四年間の一貫教育にする、今後の看護教育の発展には、大学卒の指導者が必要となる、そして専門職としての勉強を極めるための大学院に進む道を用意することなどでありました。

大学になって一番変わったことは、短期大学三年間の看護婦の教育に加え、専攻科での保健婦・助産婦教育を、四年間の教育に包含して行い、看護婦・保健婦・助産婦（但し、助産婦は選択）の国家試験受験資格が得られるようになったことです。短期大学での単位数は一般教育科目二九単位（外国語科目・保健体育科目含む）、専門科目六六単位の合計九五単位で、専攻科は六四単位（昭和三七年度保健婦教育課程・助産婦教育課程・看護管理等）でしたが、大学では一般教養科目三

六単位、外国語科目一六単位、保健体育科目四単位、専門教育科目八一単位の合計一三七単位が卒業要件（昭和四七年度）となり、一般教養科目が大幅に増え、また、大学を卒業すると「衛生看護学士」が授与されました。また、ガウンを着て卒業式が行われるようになりました。

短期大学・大学では、一年生の秋にキャッピング（Capping、たじぼ戴帽式）がありました。キャッピングは、看護を志して入学した学生が、看護婦になるための誓いを新たにするために看護婦のシンボルとされていたキャップを頭に戴く儀式です。その由来は、ヨーロッパで修道女がイバラの冠をかぶって神に仕える誓いを立てたことにあるといわれています。日本では一九二〇年（大正九）に本学初代主事のセントジョンが行なったのが始まりといわれています。キャッピングの儀式が終わると、一年生は、それまでのブルーストライプの実習服を濃紺の実習服に換え、気持ちも新たに実習場に出かけました。一九七一年（昭和四六）入学生を最後にキャッピングの儀式はなくなりました。

短期大学・（開学当初の）大学の学生生活は、寮での朝五時四五分の起床、朝食、礼拝、礼拝後は、聖路加国際病院におけるAMケアの実習、ケア終了後学内での授業、そして夕方のPMケアという大変忙しいものでした。準夜勤や夜勤の実習もありました。また、実習での経験を記録するための「実習経験録」というノート

があり、より多くの経験ができるよう、先生方が一生懸命その手配をしてくださいました。当時、先生方はいつも病棟にいて学生の指導に当たり、病棟のナースからも一置かれており、ナースは先生の言葉に耳を傾け、先生方は学生にもナースにも丁寧に指導していました。実習時間は長く、学生とナースの間には信頼関係があり、とても豊かな学びの場が提供されていました。また、病院では看護学生はとても大事にされており、大事にされる順番は看護学生・ナース・ドクター・インターン（研修医）だったという話もありました。

本学の短期大学から大学への移行の時期は、学生運動の盛んな時代でもありました。一九六〇年代前半、国会議事堂の周辺でデモ隊が機動隊と闘っていたころ、本学では学生運動の気配すらなかったのですが、一九七〇年（昭和四五）代前半に、世の学生運動の高まりと共に、小さな我が大学もその影響を受けました。学生が大学側に団交（だんじうたんじう）を求め、全寮制の廃止、集会の自由などに関する学生便覧の内容の撤回を求めて抗議したこともありました。時代の流れとともに、一九七三年（昭和四八）には学生寮は廃止となりました。

（佐居 由美・結城 瑛子）

*衛生看護
衛生看護士の「衛生看護」という名称は、
いままでは日本ではいわれてきた看護ではなく、
公衆衛生や予防なども含めた、いわゆる総合
看護・教育（comprehensive nursing
education）をもとに（しんごうかいしんごうかい）
た（金子光著「看護の灯 高くかかげて金
子光回顧録」医学書院、一九九四、一四五
頁）

*キャッピングの儀式
一九七〇年（昭和四五）、当時の一年生が、
「看護大学に看護学を学ぶために入学してい
る学生に、看護職になるという強制を強い
て厳格に認められるのは心外である」と大学
側にキャッピングの廃止を求めた。翌年の
キャッピングが最後となった。

*団交
団体交渉の意。

*学生寮は廃止
全寮制から通学も可となったのは、一九
七二年（昭和四八）で、一九七六年（昭和
五二）に学生寮は全面廃止となった。



大学や大学院の開設時には、どのような困難がありましたか。

看護に大学が必要ですか。

一九六三年（昭和三八）九月三〇日に大学の設置認可を申請した書類は、一〇センチメートルの厚さです。そこには、九月二〇日に寄付行爲を改訂し、大学の設置を決議したという理事会および評議員会の議事録、次いで「本学は女性に対し、衛生看護に関する科学的知識および技能を授け、学術を中心とした衛生看護の実践をなし得る指導的な看護専門職業人たるに必要な教育を施すことを目的とする。」という設置目的が記載されています。大学設置については、校地の不足が最大の課題であったようで、その証拠に申請書類には、校地確保にかかわる聖路加国際病院の理事会の記録も挟み込まれていました。

前田アヤ先生と檜垣マサ先生が文部省（当時）に日参し、「そらまた聖路加がやって来た」、と言われるくらいであったと、高橋シュン先生が学園ニュース二四九号（二〇〇〇年）に書いています。ガリ版の手書きの書類がほとんどで、書類に

は〇字削除、〇字訂正の印があちこちに押されていることから、ワープロやコピーがなかった時代、申請書の作成は大変な骨折りだったろうと推察できます。

戦後一九五四年（昭和二九）から一〇カ年にわたった短期大学から大学への転換は、①短期大学三年に加えた一年の専攻科は、教育が分断されるので好ましくなく、四年の一貫教育にしたい、②今後少なくとも我が国の看護教育を短大レベルにするには、大卒の指導者が必要であると、その趣旨が述べられています。また前田先生は、大学設置の意味を、専門職であればさらに専門の勉強をきわめる道、すなわち大学院へ進める道を作る必要があったと記しています。

一九六四年（昭和三九）一月二五日に設置の認可があり、橋本寛敏学長のもと、四月に大学一期生が入学しました。この年は、東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通し、奇しくも東京大学医学部衛生看護学科が保健学科に改組された年でもありました。

看護に修士が必要ですか。

前田先生は大学設置のときから、大学院を視野に入れていたと推察できますが、一九七四年（昭和四九）、第四代学長に就任された日野原学長（当時）は、その時から大学院を作って日本の看護教育のシステムを発展させたいと考えていたと、

★寄付行為
学務法人のもっとも大切な基礎となる原則。

★前田アヤ（一九〇〇～二〇〇〇）

大学設置時、短期大学主事。大学開設と同時に衛生看護学科長、主事、学部長は現在の学部長に当たる。専門は公衆衛生看護学。

★檜垣マサ（一九二一～一九九四）

大学設置、大学院設置全に携わる。博士課程設置準備中、学部授業研究科長。専門は看護史・看護理論。

★高橋シュン（一九一四～）

大学院修士課程設置準備中、学部長。修士課程設置と同時に研究科長を兼務。専門は成人看護学。一九九七年ナイチンゲール記念賞受賞。



前田アヤ



檜垣マサ

語っています（「聖路加看護大学の七〇年」）。一九七九年（昭和五四）の学園二ユー
ス六五号には、大学院構想は過去三カ年検討してきたことであり、今年は設置認可
をめざすと明言し、翌一九八〇年（昭和五五）三月に認可があり、四月に修士課程
に一期生が入学しました。

大学院開設の準備の中で、文部省の担当官から、看護には単独で修士課程を構成
するだけの内容があるかと問われたと、近藤潤子教授（当時）は回想し、大学院設
置の追い風は、エジプトから吹いたと語っています。既に大学院を持つエジプトか
ら、大学院教育のために教授派遣の依頼を受けた衝撃が、促進剤になったというの
です（「聖路加看護大学大学院開設二〇周年記念誌」）。その頃本学を取材した高須
須美子氏は、準備を進めていた本学より、千葉大学に一年先を越された、と悔しそ
うに語るのを聞き、先端を行くものの自負を感じたと記しています。

看護に博士が必要ですか。

修士課程設置の後、日野原学長（当時）のリーダーシップのもとで、博士課程増
設へ向けてさまざまな準備がなされました。教員の獲得や若手教員の育成を進め、
教育課程の構築に全学で取り組んだ様子が、「聖路加看護大学の七〇年」の五〇、
五四頁に詳細に記録されています。

博士課程の増設では、さらに看護学とは何か、他学問とどこが異なるのかの説明
が求められました。看護学が独立した学問であることをいかに説明するか、書き直
した原稿はダンボール箱数箱になったと、南裕子教授（当時）が述べています（「聖
路加看護大学大学院開設二〇周年記念誌」）。

一九八六年（昭和六二）の申請は不備で審議にかかりませんでした。一九八七
年（昭和六二）一一月に提出した申請書には、「看護学においては、健康問題をそ
の人の日常生活の構造と機能の問題として、健康状態と人間の日常生活、環境との
関連の上で捉える。また、看護学では、健康問題を持つ人々がその人々の健康状態
を高めるための生活行動をより望ましい状態にしうるように直接的・間接的ケアを
行う実践を重視する。」と看護学を説明しています。

日野原学長（当時）は、視察に訪れた設置審議会委員から、どこに研究室（実験
室）があるのかと問われ、ケアの学位には病室と患者は必要だが、実験室はいらな
いと説明したと回想し、しかしこれは理解されなかったと、述べています。研究科
長への就任が決まっており、審議会委員へ対応した常葉恵子教授（当時）は、看護
職に対する多様なイメージを持つ人々へ、平易な言葉で看護学を説明する難しさを
痛感したと述べています。

* 近藤潤子
当府母性看護学教授。修士課程設置に尽力。
現・大使大学長。

* 高須須美子
聖路加看護大学二人間の理解めざすバイ
オニア。朝日ジャーナル。2016. 1081

* 南裕子
当時精神看護学教授。博士課程増設に尽力。
現・大姫路大学長。

* ケアの学位には病室と患者は必要だが、
実験室はいらない。
日野原重明。時期尚早というならば実験
してみても実現する。天野郁夫編。大学を語
る22人の学長。玉川大学出版部。1986。
1991.1997

* 常葉恵子（一九二七～二〇〇四）
博士課程増設時学部長兼研究科長。一九
九八年より第五代学長。

* 看護学を説明する難しさ
常葉恵子。聖路加看護大学博士課程日本
で最初のスタート、難しかった。『看護学
の説明』看護。45(7). 63-77. 1993

大学、大学院修士課程、博士課程と、本学は、看護の学としての発展を牽引し、困難な扉を開いてきました。また、看護教育の高等教育化の必要性と、学問としての看護を社会に示し続けて歩んできました。檜垣マサ先生が「私学として、また単科大学として幾多の困難はあるが、長い歴史のもとに建学の精神によって培われた伝統を失うことなく、不断の努力と前進する気風が本学の根底に流れており、これは顕著な特色としてあげられるのではないかと思う」と語った通り、トイスラーの建学の精神が、脈々と流れていることを感じます。

(菱沼典子)

*檜垣マサ
建学の精神を生かした看護教育・看護
35 (14)・1320, 1983



長く続いた女子教育の中に
男子学生が受け入れられるようになったのはなぜですか。

日本で女子に対する高等教育が始まったのは、一八七二年（明治五）に学制が発布されてからのことです。当初、大学に女子が入学する道は閉ざされており、女子が入学できたのは官公立の師範学校でした。明治三〇年頃になると、私立の女子教育機関として専門学校が創られました。大正時代に入ると、女子も大学進学が可能になりましたが、国は女子大学の設置には消極的で、女子は専門学校への進学でよいと考えていたようです。本学の前身、聖路加国際病院付属高等看護婦学校が設立されたのは一九二〇年（大正九）のことで、まさに専門学校の新設が急速に進んだ時期と重なります。本学は良妻賢母を目指す教養教育としてではなく、看護という体系的な知識と技術を身につけた専門職を志向していた点では多くの他校と異なっていたかもしれませんが、まだまだ性別役割観に強く束縛されていた時代に生まれたのです。

昭和時代に入り聖路加女子専門学校となり、第二次世界大戦後、一九五四年（昭

和二九)に短期大学、一九六四年(昭和三九)に大学となった際も、女子教育が賞されました。

一九八六年(昭和六一)の男女雇用機会均等法の施行をきっかけに日本の女子大学の共学化が徐々に進み始めました。こうした動きに押される気配があったのか、本学の女子教育に対する変化の兆しを一九九三年(平成五)の大学新校舎建築計画にみることが出来ます。新校舎は五〇年間使用していくと考え、設備だけはしておく方がよいと、各階に男子トイレを設置する判断がなされました。ただし、建学の精神の一つの柱である女子教育を将来どうするかは、この設備とは別の問題として議論すべきであるとされました。しかし、この建築計画の中に、将来男子を受け入れる可能性を大学が視野に入れ始めたことをみてとることが出来ます(一九九三年(平成五)九月二四日理事会議事録に)。

一九九四年(平成六)の理事会から、大学の将来構想の一つとして、共学化の議論が本格化しました。看護専門指導者の育成のためには大学院の充実が必須であり、大学院入学における性差別を取り払い、他の看護系大学を卒業した男子を受け入れ、ゆくゆくは学部においても男子を受け入れるようにすべきであるとの問題提起がなされたのです(一九九四年(平成六)九月二三日理事会および評議員会議事録に)。すでに科目等履修生、研究生などで男子を受け入れられるかという問い合



男子学生の受入れ

わせがあり、大学としても検討せざるを得ない状況にありました。聖路加看護大学は女子の看護婦教育を続けることが使命である、男子を受け入れることで女子の就学の機会が減る懸念がある、共学化は時代の流れである、男子が入ることで教育の多様化が計られるなど、賛否両論、意見が交わされた結果、一九九五年(平成七)、男子を科目等履修生、研究生として受け入れること、また、学則の検討を行って大学院に受け入れることが決定しました(一九九五年(平成七)五月二六日理事会議事録に)。大学院については学則上、問題はないとのことで同年、受け入れ可能との判断が下されましたが、しばらく積極的な広報は行われることなく、実際に大学院に男子学生が入学したのは二〇〇〇年(平成一二)度からのことでした。学部については、学則第一条の「女子に対し…」という文言を削除する必要があり、一九九九年(平成一一)の教授会の議を経て、二〇〇〇年(平成一二)の理事会で改正が承認されました。こうして聖路加看護大学の女子教育の歴史の幕は下るされ、二〇〇一年(平成一三)度から学部にも男子学生を迎えたのです。

すなわち、職業や雇用における機会を前に男女の平等は保障されるべきという社会の流れを背景に、看護学という学究の場においても、むしろ差別されてきた男性に門戸を開くことによって、より高度な看護の専門性を追求する姿勢を具現したいとの考えから、男子を受け入れたのです。

(森明子)



聖路加看護大学の学長はどのようにして選ばれるのですか。
また、歴代の学長（校長）はどのような方でしたか。

私立学校法で学校法人の業務の決定機関は理事会であると定められています。この法律に基づき理事会の承認を経て、理事長により学長が任命されます。学長候補者の選任プロセスは、理事会のもとに理事長またはこれを代理する者、学校法人代表三名（理事会互選、内一名は評議員より選任）大学教員代表三名（教授会互選二名、研究科委員会互選一名）の七名による「学長推薦委員会」を設置し、学外者も対象に広い範囲から学長候補者の検討が行われます。理事会は、推薦された候補者から直接大学の課題、将来構想、所信などを聴き、キリスト教精神尊重を確認したうえで選任されます。

聖路加国際病院付属高等看護婦学校から始まった本学は、聖路加女子専門学校、聖路加短期大学、聖路加看護大学へと創立以来約九〇年の年月を経て移行しましたが、歴代の学長（校長）を振り返ると、（ホワイト女史を除いて）校長には歴代の病院長が就任しました。トイスラー、久保徳太郎、橋本寛敏の各氏です。初代の聖路

加国際病院付属高等看護婦学校校長は病院内組織のため、ルドルフ・B・トイスラー院長が兼任し、実質的な責任者は、アリス・C・セントジョン女史でした。トイスラー校長はドイツ系のキリスト教宣教師でした。身長一八〇センチほどの長身でピンホールのシャツを着た写真の通りハンサムな方でした。若い頃の性格は激しやすく短気な熱血漢、いったん目標を定めたら一途に進進するタイプで、築地病院とよばれた時代から病院建築の募金活動をアメリカ各地で行い、集めた資金で聖路加を建築するなど現在の聖路加国際病院の基礎を築きました。

本学の講堂にその名が残されているアリス・C・セントジョン女史は、日本のナースの品性を高め、高等教育を施すためにトイスラーが米国から招聘した方で何事にも積極的で厳格すぎるとまでいわれた教育者でした。荒木いよ婦長と結婚した久保徳太郎校長はトイスラー逝去の後を継いで看護教育に尽力し、聖路加礼拝堂の竣工を行いました。

第三代校長は、一九四〇年（昭和一五）より橋本寛敏先生です。橋本先生のは就任時代は、日本が日中戦争から太平洋戦争へと突入し、一号館の十字架は軍部の命令により格上より取り下ろされ、聖路加国際病院の名称は大東亜中央病院、本学も興健女子専門学校と改称させられて国を挙げて戦争協力を強制させられた大変な時代でした。終戦直後のGHQによる校舎の接収や日本赤十字社看護看護養成部との合



橋本寛敏

★橋本寛敏（一九〇〇～一九七四）
戦前の女子専門学校時代から短期大学を経て大学設置後、第三代学長を務める。同時期、聖路加国際病院院長。

同教育の時代を経て、一九四八年（昭和二三）、サラ・G・ホワイト女史が第四代校長に就任、戦後の教育改革により一九五三年（昭和二八）学校法人聖路加看護学園設立、続く一九五四年（昭和二九）短期大学が認可され、専門学校を引き継ぐ形でホワイト女史が学長に就任しました。ホワイト学長が定年退職した後、再び橋本先生が就任し、一九六四年（昭和三九）四年制の看護大学が認可されました。大学昇格後の学長は橋本寛敏先生から一九七四年（昭和四九）に日野原重明先生が学長に就任しました。日野原学長（現理事長）の強力なリーダーシップのもと、私学で初めての看護学大学院修士課程、さらに日本で初めての大学院博士課程を増設しました。高齢化社会に向かって国による一県一看護大学構想のもと全国各地に看護系大学が設置され看護出身の学長が次々に誕生する中、本学でも医師ではない看護出身の学長をとって強い要望が出されて一九九八年（平成一〇）常葉恵子先生が学長に就任しました。新校舎建設、二号館取得、二一世紀COE採択、看護実践開発研究センターの発足に尽力されましたが、在任中の二〇〇三年（平成一五）ハワイにおいて水難事故に遭い急逝、学内は深い悲しみに包まれました。

現・井部俊子学長は、聖路加国際病院看護部長を経験し、前日本看護系大学協議会会長、日本看護協会副会長でもあります。また、文部科学省、厚生労働省等の委員を歴任し、日本の看護界のリーダーとして活躍しています。

（山口 喜義）



WHOコラボレーティングセンターとは
どのような役割・機能をもつセンターですか。

WHOコラボレーティングセンターは、WHO指定研究協力センターと呼ばれ、WHO（世界保健機関（World Health Organization））が日本政府の了解のもと、指定している研究領域において協力する施設です。四年を任期とし、最終年度に指定された研究領域の活動成果を見直して、再任命されます。

聖路加看護大学のWHOコラボレーティングセンターは、プライマリ・ヘルス・ケア看護開発協力センターと称し、一九九〇年（平成二）にWHOから任命されました。任命された時のセンター体制は、聖路加看護大学を事務局として、千葉大学看護学部、東京大学医学部保健学科看護学講座、国立公衆衛生院看護学部（当時）の四施設の協働体制でした。その後、各施設の事情とコラボレーティングセンターの任命条件の改正で、第四期の二〇〇三年（平成一五）から、聖路加看護大学単独で活動するようになりました。本看護開発協力センターの構成員は、聖路加看護大学の全教員であり、本看護実践研究開発センターの国際部門がその事務局となっ



常葉恵子



日野原重明

＊日野原重明（一九二一～一九七四）一九九八年（昭和四九）平成一〇）、聖路加看護大学第二代学長。現在各学部長および聖路加看護学協会の理事。

ています。

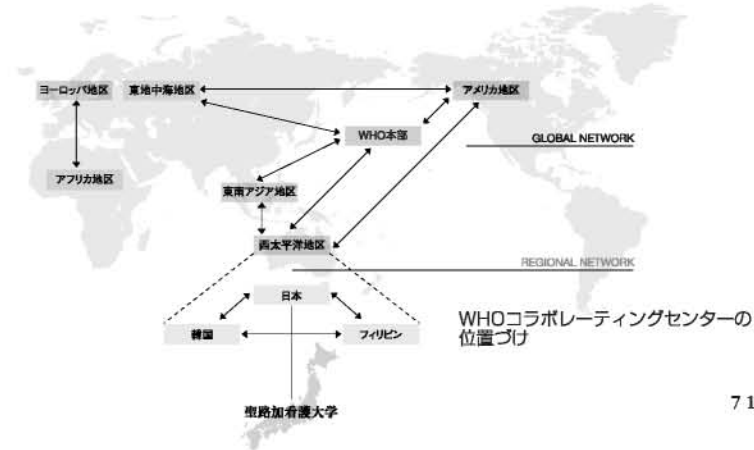
日本にプライマリ・ヘルス・ケアの看護開発協力センターが出来た背景には、人々の健康増進に格差が広がり新たな健康課題が浮上し、看護・助産職の力が必要になったことがありました。一九四八年（昭和二三）にWHO憲章が採択され、WHOが正式に発足し、加盟国の健康の推進の技術援助を進めてきました。その後、一九七八年（昭和五三）に採択されたアルマ・アタ宣言の中で、開発途上国向けの健康創造のための保健活動を明確にし、プライマリ・ヘルス・ケアの進め方が示されました。さらに、一九八六年（昭和六一）に、ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章が採択され、先進国向けの健康増進の戦略を明確にして、各加盟国は健康増進を展開してきました。そのような折、国民の健康状態が改善された国と改善が思うように進まない国の健康格差が明確となりつつありました。その解決にはプライマリ・ヘルス・ケアをさらに推進することが重要であり、そのために、看護・助産を強化する必要性がありました。この目標を達成するために、プライマリ・ヘルス・ケア看護コラボレーティングセンターが指定されたのです。西太平洋地区においても、コラボレーティングセンターを増やすために、日本にも呼びかけがあり、プライマリ・ヘルスケア看護開発センターが組織され任命を受けました。

聖路加看護大学のWHO看護開発センターの目標は、プライマリ・ヘルス・ケア

を促進するための教育、実践、研究を国内・国外の研究・教育機関と連携して推進することです。二〇〇八年（平成二〇）から始まった第五期の活動目標（Terms of Reference）には、次に掲げる四つがあります。

- 一、ミレニアム・デベロップメント・ゴール（二一世紀の開発目標）と少子高齢化に貢献する看護実践モデルを開発すること。
- 二、プライマリ・ヘルス・ケアにおける看護のリーダーシップを推進する。特に、人々のための人々による健康を実現できる実践モデル開発を推進する。
- 三、個人・家族・地域のエンパワメントを目指し、エビデンスを用いて実践例の開発と研究を行う。
- 四、プライマリ・ヘルス・ケアにおける看護・助産についての教育と実践を向上するため、研究やシステムの改革を支援する。

具体的には、世界の看護・助産コラボレーティングセンターとのネットワークの中で、開発途上国の看護・助産の量的・質的改善に寄与できる研究活動を進めていきます。また、日本国際協力機構が開発途上国から受け入れている看護・助産のリーダーたちの研修の協力をしています。



事務局では、研究チームを作って、国際医療協力研究等の助成金を獲得して、研究を進めてきました。過去一〇年間に行った四つの研究は研究報告書としてまとめました。研究名は左記の通りです。特に、二〇〇二年度（平成一四）から二〇〇四年度（平成一六）の研究の成果から、翌二〇〇五年度（平成一七）に修士課程に国際看護学のコースを開講しました。

過去一〇年の研究

- ・一九九九年（平成一一） 厚生省医療技術評価総合研究事業、看護の質の確保に関する研究 プライマリ・ヘルス・ケアに基づく看護モデルの開発―都市型プライマリ・ヘルス・ケア看護モデルの評価および開発途上国におけるプライマリ・ヘルス・ケア看護モデルの開発―
- ・二〇〇〇年度（平成一二） 厚生労働省医療技術評価総合研究事業、看護の質の確保に関する研究 プライマリ・ヘルス・ケアに基づく看護モデルの開発―高齢社会における看護モデルの開発―
- ・二〇〇二～二〇〇四年度（平成一四～一六） 国際医療協力研究委託事業 研究報告書、開発途上国における看護技術移転教育プログラムの開発に関する研究
- ・二〇〇五～二〇〇七年度（平成一七～一九） 国際医療協力研究委託事業 研究

報告書、開発途上国の地域看護のあり方に関する研究、地域看護力強化のための人材育成プログラム開発協力・実践研究と評価

（田代 順子）



聖路加看護大学は最近、「二一世紀COEプログラム」という大型の研究費を得て、看護学の分野では先端の研究をおこなっているとききました。詳しく教えてください。

二一世紀COEプログラムは、文部科学省による「大学の構造改革の方針」(平成一三年六月)に基づいて描画された事業です。COE (center of excellence) とは卓越した研究拠点という意味です。わが国の大学が、世界トップレベルの大学と伍して教育及び研究活動を行うことができるように、優れた実績を持ち先進的な課題に取り組んでいる大学に重点的に補助金が投入されました。これに選考された大学は、全国六八六大学中(平成一四年当時)五〇大学(二三件)、看護系では三大学(三件)が選ばれ、そのうちの一つが本学でした。

本学では二〇三〜二〇七年度(平成一五〜一九)の間、四領域二一研究プロジェクトにおいて、People-Centered Careモデルの開発を推進してきました。各研究領域において、「コミュニティとの協働により」「自分にあつた医療の意思決定を支えるガイド開発」(性暴力被害者支援ガイドライン)「慢性病を持つ高齢者の自己管理モニターを備えた遠隔看護支援システム」など、市民が主体的に自分のため

の医療を選んでゆくための指針、場や時間を越えて必要な看護サービスを利用する有機的な医療システムを作り上げました。

健康は、世界中のだけれど大切に思っているものです。一人一人がそう思っている、社会には、心無い言葉や視線を恐れ病いの中で孤立してしまったり、氾濫する健康情報に翻弄され不安を募らせたりする人たちが少なくありません。聖路加看護大学二一世紀COEプログラムでは、「市民が主人公のケア(People-Centered Care)」をめざして五年間の活動を行ってきました。〈病とともに生きる人々〉〈社会構造のひずみで生きる人々〉〈先進医療のなかで葛藤する人々〉〈将来の健康への備えを得がたい人々〉と一緒に、医療者と患者という枠をこえて、人々が本当に手に入れた健康資源を作りだしたり、分かり合える関係性づくりや安心して納得できる医療システムづくりに取り組んできました。

〈市民が主人公のケア〉を進めていくプロセスで見出すことのできた、ケアの真髓について、いくつかお伝えしたいと思います。

一つ目は、〈機会や場〉の重要性です。病院は医療従事者のテリトリーなので、なかなか、主人公である患者の本音や思いが出せないこともあります。言葉をつくしてもすれ違ってしまった医療従事者と患者の思いが、病院を一步出た、がんサポートプログラムの場で語られることにより、ねじれた糸が紐解かれ、割り切れない

い思いの解消につながることもあります。また、いのちが生まれてくる場で、死産を経験した人々が悲しみや辛さについて語る機会はいままであまりないことでした。亡骸をやさしく包む「天使のキルト」が病院に持ち込まれることにより、悲しみを語る機会が生まれます。このように、言葉にできない言葉が受け止められる場や機会を、生み出していくこと、それがPeople-Centered Careの真髓のひとつでした。

二つ目は、ゆるやかな境界です。ケアの提供者とケアの受け手というこれまでの役割にとらわれず、両者の役割をゆるやかな境界とすることにより、手にしたかったケアやケアシステムが生まれます。不妊治療を受ける人々が、得たい情報や知識を織り込んだ「不妊治療の私らしい選択:My Choice」小冊子を、看護師と当事者が知恵を出し合って作成しました。看護師は、当事者の体験から治療にまつわる様々な選択に必要な配慮やサポートのあり方を学びます。また、当事者の方々は、自分たちの体験をまとめ、知恵として普及していく方法を看護師から学びます。既存の役割を超えて、互いの能力や資源を尊重し活かすことで、求めているケアガイドブックの誕生に至ります。

三つ目は、ヘリジョンと組織化です。当事者が自分では気づきにくい、言葉にしにくい健康ニーズを掘り起こし、解決の糸口をみつけて、必要なケア活動を興し

ていくには、それを実行する人と仕組みが必要となります。五歳児とその母親を対象にした「からだを知ろうキャラバン」活動では、子どもたちが絵本や体操など楽しみながら身体のしくみや不思議さを学習できるプログラムを提供しています。健康の源を子どもたちから学ぶ。このことが健やかな社会作りの根本になるというビジョンが核となり、磁場が広がるように多様な人材や組織の連携が生まれました。この活動を機に、中央区中の幼稚園、保育園で、「からだなんだ」というちょっとへんてこりんな体操がはやっていくそうです。

People-Centered Careは、時間と手間のかかるケアアプローチといえます。一方で、時間と手間はケアの継続性を生み出すものでもあります。五年間、People-Centered Careを推進してきたCOEプログラムにより、聖路加看護大学には、専門職者の輪だけではなく、市民の方々とあたたかな輪が広がりました。この研究活動に大きく貢献した大学院生や学部学生とも、新しいケアを切り拓いた楽しみな大変さを共有できました。今後は、彼らが、People-Centered Careの種まきをつづけていくでしょう。

(小松 浩子)



「からだを知ろうキャラバン」活動



聖路加の卒業生でナイチンゲール記章を受賞した人がいますか。
その方達のことを教えて下さい。

看護界における世界最高の栄誉・フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞した卒業生は、湯槇ます先生、高橋シュン先生、永井敏枝先生なげいとしえの三名です。

受賞資格は、平時または戦時において、傷病者、障害者、紛争や災害の犠牲者に対して、献身的な活動や創造的・先駆的な貢献をした看護師等で、一九九三年（平成五）からは、男性、さらに公衆衛生と看護教育分野における貢献も受賞対象に追加されました。

この記章は、鍍銀めいぎんで作製されアーモンド型をしています。記章表面には燭台を手にしたナイチンゲールの像と「一八二〇～一九一〇年 F・ナイチンゲール女史記念」の文字があり、裏面はラテン語で「博愛の功徳を顕揚し、これを永遠に世界に伝える」と刻まれています。三名の受賞理由を紹介します。

湯槇ます先生（一九七七年 第二六回受賞）

一九二四年（大正一三）、聖路加国際病院付属高等看護婦学校に入学、卒業後、同病院に勤務し、優れた才能と訓練された技術を発揮し、外国人傷病者の看護に貢献した。一九二七年（昭和二）、ロックフェラー奨学生として留学し、外科看護、麻酔学を学び、帰国後は、看護を学問的に理論づける努力をし、東京空襲の際は、多数の傷病者看護の陣頭指揮をした。戦後、東京看護教育模範学院の教育主事として、看護教育の在り方、看護組織の確立、公衆衛生看護の体系化等、看護の水準向上に努力した。一九五四年（昭和二九）日本初の大学制度による東京大学医学部衛生看護学科に就任し、翌年、国立大学初の看護師出身の教授となり、看護大学教育の先駆者として鬼才を発揮した。（この時の苦悩は、「グロウイング・ペイン」『拓けゆく看護のなかで』日本看護協会出版会、一九八八年）の中で述べている。）また、ナイチンゲールの実像と業績をわが国に普及した功績も高く評価された。

高橋シュン先生（一九九七年 第三六回 受賞）

一九三五年（昭和一〇）聖路加女子専門学校卒業後、聖路加国際病院に勤務。一



湯槇ます

九四三年（昭和一八）フィリピンマニラ聖路加病院副総師長兼看護取締として派遣され、その後、アメリカ軍の捕虜となり、一七四兵站病院^{（いだ）}で日本人捕虜の看護にあたった。戦後アメリカに留学後、東京看護教育模範学院で、新しい看護学と教育法を実践し、戦後の看護学教育の基礎を築いた。聖路加看護大学発展の歴史と共に歩み、大学院初代看護学研究科長を歴任し、看護学教育の質向上に貢献した。この間、厚生労働省、文部科学省および日本看護協会等の各委員として、看護制度の確立と看護学の体系化、看護教育カリキュラムの充実・強化等に多大な寄与をした。ベツトサイドで、科学的根拠に基づいた看護実践の模範を示す中で聖路加看護大学の中核となる愛の精神、看護の本質、使命等を教授した熱心なキリスト教信徒でもある。

皇后陛下は「高橋さんが看護に注がれた真摯な情熱と、病み苦しむ人々に寄せられた深い慈しみの心が、どうかこれからも広く看護の世界に受けつがれ、傷病者一人一人が、かけがえない人生を生きぬく上の支えとなることを願います。」と述べられた。

★兵站病院
戦場の後方にあつて、負傷兵等の治療・看護にあたる病院。



高橋シュン

永井敏枝先生（二〇〇三年 第三九回 受賞）

一九四四年（昭和一九）興健女子専門学校卒業後、事業所保健師、高等学校教諭を経て、一九四九年（昭和二四）東京鉄道病院申種看護婦養成所開設準備から三〇年間、教務主任、教頭を歴任、情操教育を重視し、創造性や感情豊かな看護師育成のモデルとなった。理論に則った看護実践の必要性から、一九五七年（昭和三二）我が国唯一無二の教科書といわれた「看護原理」を著した。一九五八年（昭和三三）中央鉄道学園で、幹部看護師の教育を開始し、日本における継続教育の画期的・先駆的な取り組みによって看護の質向上に貢献した。その後、北里大学看護学部等で看護大学教育の基礎を築き、看護教育の発展に寄与した。この間、厚生労働省、文部科学省等の各委員を歴任、看護行政の中心的な役割を果たし、看護制度改革、国家試験制度の改正等に寄与した。

皇后陛下は、永井先生および同時に受賞された二名に対し、「苦しむ人々への思いやりと共に、優れた洞察力和見識を持つ皆様方の教育を受け、今日、多くの教え子が看護の様々な分野で活躍されていることを、心強く思います。」と述べられた。

（岩井 郁子）



永井敏枝



聖路加の卒業生には、
開発途上国における看護活動をした人が多いと聞いていますが、
どんな活動をしているのでしょうか。

聖路加女子専門学校、短期大学そして現在の看護大学・大学院の卒業生・修了生が、一九六〇年代から今日まで、開発途上国において看護・助産職の育成や、病院における看護力の向上や母子センターをベースにしたプライマリヘルスケアのシステムづくり等の領域で働いてきました。これらの卒業生・修了生の多くは、日本聖公会等の教会組織、日本キリスト教海外医療協力会（Japan Overseas Christian Medical Cooperative Service (JOCMS)）や、その他の非政府援助機関、日本国際協力機構（Japan International Cooperation Agency (JICA)）、で働いています。全ての卒業生の看護活動を紹介することはできませんが、一年以上の長期に渡って活動した卒業生とその活動を、把握できている範囲で紹介します。

キリスト教系海外医療協力での看護活動

たけのぼる 恭子（たけのぼる けいこ）
立山恭子さん（一九六三年専攻科卒）は、一九六五年（昭和四〇）から三年間、日本聖公会北関東東教区の親愛修女会の三人のシスターとともに、当時の東パキスタン、バリサル市、オックスフォードミッションが運営している聖アン病院に派遣されました。活動の内容は看護・準助産（Auxiliary Nurse Midwife）の養成と産院の運営指導でした。その後、東パキスタンはバングラデシュとして独立しました。その混乱期の一九七二年（昭和四七）、イギリス人シスター達が帰国した後の聖アン病院で短期の協力をしています。

また、日本キリスト教海外医療協力会のワーカーとして、一九六〇年代後半からは、和田・金田・川口・清水さんらの卒業生が派遣されています。

わた 和子（わた けいこ）
和田（現 石井）光子さん（一九六七年専攻科卒）は、一九六九年（昭和四四）から二年間、南インド、オダンチャトラムのクリスチャン・フェロウ・ホスピタル（Christian Fellow Hospital）で助産師として活動し、帰国途中には、ネパールでも短期の奉仕をしました。また、当時情報が少なかったアフガニスタンの医療事情を視察し、報告書も書いています。

きんた 金田（現 斎藤）
金田（現 斎藤）洋子さん（一九六八年卒）は一九七六年（昭和五一）から一九八一年（昭和五六）まで、バングラデシュ・キリスト教協議会の保健プログラムに

派遣され、南部低湿地帯（バリサル県とフォリドブル県の県境周辺）に散在する複数の母子クリニックのフィールド・スーパーバイザーとして、全戸訪問を現地のスタッフと実施し、それをもとにした活動を指導しました。

なほのちのち
川口恭子さん（一九八二年卒）は、一九八二年（昭和五七）から三期にわたって金田さんが働いていた同じ地域で、ゴルノディカトリック教会が始めた村づくり、人づくりプログラムにヘルスアドバイザーとして迎えられ、村人の組合活動に結核対策や五歳以下の小児健診等を組み入れ、定着させるシステムづくりに尽力しました。その後、これらの経験をいかしてJOCsのバングラデシュ・ダッカハウスを拠点にアジア地区のワーカーのアドバイザーとして働きました。現在は、JOCs本部でアジア・アフリカで働くワーカーの支援・相談役、海外のワーカー受け入れ先との交渉役として活動されています。

立山恭子さんは、二〇〇二年（平成一四）から二〇〇四年（平成一六）までカンボジア事務所代表として派遣されています。

しみずなおこ
清水範子さん（二〇〇七年修了）は、国際看護学の修士課程修了直後に、タンザニア、タボラ大司教区保健部門が管轄する村のプライマリヘルスセンターを中心に母子保健計画をスタッフとともに立案しプログラムを展開しています。

しらほまさえこ
白浜喜恵子さん（一九八二年卒）は、インマニエル綜合伝道団からアフリカ、

ケニヤ、ケヌエック病院に派遣され、病棟看護師として活動しました。

国際協力機構の海外医療協力での看護活動

国際協力機構の医療協力活動は、技術支援要請のあった国の政府と話し合いで決まった協力ですので、仕事の内容は、全体の看護教育システムや医療環境の充実に関わる活動が多くなります。多くの卒業生が看護教育の専門家や専門病院での看護管理者として活動しています。

一九七八年（昭和五三）から五年間のインドネシア看護教育プロジェクトでは、永野貞さん（一九三三年卒）がチームリーダーとして、その後藤門政子さん（一九三七年卒）が看護教育開発センターを拠点としてそのセンター管理や養成学校の教員の協働者として活動しました。タイの看護教育プロジェクトでは、一九八〇年（昭和五五）から七年間、ひびのみちこ 日比野路子さん（一九四一年卒）と津島優子さん（一九七〇年卒）が保健省看護教育課を拠点に保健省看護教育行政官と協力してタイの看護教育開発活動をしました。

エジプト、カイロ大学小児病院プロジェクト一期（一九八三―一九八八年）では、プロジェクトリーダー立山恭子さんのもと、わたなべあかね 渡辺薫さん（一九八〇年卒）、赤松美保さん（一九七九年卒）、まつみほ 小野正子さん（一九七六年卒）、おのまさこ 野田（現 熊田）洋子

さん（一九七一年卒、二〇〇二年博士課程修了）が小児看護の質向上のために活躍しました。

パキスタンの看護教育プロジェクトでは、一九八七年（昭和六二）から第一期三年間、田代順子さん（一九七二年卒）と山本あい子さん（一九七五年卒、一九八二年修士課程修了）は、医科学研究所・看護大学で看護教員とカリキュラム開発や教育方法を開発しました。カイロ大学看護学部プロジェクト（一九九四年―一九九九年）では、立山恭子さんがチーフアドバイザーとしてプロジェクト運営に当たり、成果としてその後看護学部は医学部から完全独立しました。また、ケニアの医療技術強化プロジェクトの看護教育専門家として、成瀬和子さん（二〇〇九年博士課程修了）は、二〇〇一年（平成一三）から二年間、ケニア国医療技術訓練学校の教員の教育能力の改善のために活動し、続いてスリランカの看護教育行政におけるアドバイザーとして保健省看護課を拠点に看護人材の質向上のために貢献しました。エルサルヴァドルの看護教育強化プロジェクトの二期派遣で、森山ますみさん（二〇〇八年修士課程修了）は、厚生福祉省看護課を拠点に、看護課および養成機関の看護行政官や養成機関の看護教師の力量を高める活動をしました。

ブラジルでの母子保健「光のプロジェクト」では、吉野八重さん（一九九七年卒）および毛利多恵子さん（一九八二年卒、一九九四年修士課程修了）が活躍しま

した。

その他、多くの卒業生・修了生が、国際協力機構の青年海外協力隊として、保健師隊員、助産師隊員、そして、看護師隊員として、さまざまな開発途上国の施設に派遣され、ボランティア活動をしています。また、これらの開発途上国での経験を基に、さらにより良い協力ができる様に大学院で国際看護学を学び、健康課題の研究をして、その研究情報をそれらの国に還元する働き方もしています。

（田代 順子）



聖路加同窓会はどんな活動をしていますか。

聖路加同窓会は、聖路加看護大学の建学の精神を継承し、会員相互の親睦と啓発をはかり、母校の発展の推進力となることによって社会に貢献することを目的としています。

二〇〇九年（平成二一）現在、会員は約三五〇〇名います。同窓会は、年代を超えた、また地域を超えたソーシャルサポートとしてのネットワークをもち、同窓生が看護職者として社会的な役割を果たしていくことを支援するという重要な役割を与えられています。

同窓会の事業には、次あげるようながあります。

同窓会会員のための活動

同窓会は、会員のための活動として、会員の動向や互いの情報交換ができるよう、会員名簿の作成や「同窓会だより」の発刊をおこなっています。「同窓会だより」は、年二回発行する会報誌で、今年度は一二五号となりました。同窓会総会の概要や講演会の報告、支部活動報告、同窓生の活躍、大学の近況など、同窓生と母校についての様子を会員に伝えることができるように作成しています。また二〇〇六年（平成一八）には、同窓会のホームページを開設し、会員に役立つ情報を随時、知らせています。

会員の教養と専門的スキルを向上させるための活動として、年一回、教育委員会主催による講演会が開催され、毎年多くの同窓生が参加しています。二〇〇八年（平成二〇）度は、本学の同窓生で、がん専門看護師の田村恵子さん（たむらけいこ）一九九六年修士課程修了）が「人の最後に寄り添う看護」というテーマで講演し、参加者の共感を呼びました。多くの同窓生が、保健・医療・福祉や学校保健など、社会の様々な領域・分野で第一人者として活躍しているというのが、聖路加同窓会の大きな財産です。また同窓会支部の設立にも積極的に働きかけており、同窓会の活動を通して、情報交換や意見交換ができる機会も拡がっています。同窓会は、同窓生が希望する活動の実現を目指しています。

母校のための活動

同窓会では、母校のための活動として、「大学史編纂・資料室事業」や「大学施

設備及び教育、研究充実基金」への協力をおこなっています。また、白楊祭広告費や体育デー・委員会への功労費なども企画し、これらの活動をサポートしています。白楊祭では、毎年ブースを設け、同窓会活動や、同窓生にまつわる資料などを展示しています。

二〇〇八年（平成二〇）度より新しい事業として、「聖路加同窓会奨学金」が母校の学生を少しでも支援するために設立されました。

同窓会は同窓生が納入する会費で運営されています。クラスごとの活動は、どの卒業年度も活発に行っていると思います。そのクラスの活動の輪を広げていくことで、卒業生・修了生全体で運営する聖路加同窓会の活動は充実し、母校の発展を支えることができます。聖路加看護大学の歩みは、日本の看護の歩みでもあります。今後の母校の輝かしい未来のための活動を同窓会は目指して行きたいと考えています。

（柳橋 礼子）



聖ルカ礼拝堂はどのようなところですか。

聖ルカ礼拝堂は、キリスト教の中でも英国国教会の流れを汲む、カトリックとプロテスタントの中間・中道とも位置づけられる日本聖公会に属します。米国聖公会や米国市民からの精神的、財的、信仰的な寄付により一九三五年（昭和一〇）八月着工後、翌年一月に竣工、十二月に聖別され使用に供される事となりました。

米国聖公会から宣教医として来たトイスラー先生は「チャペルは本院のハート（心臓）である」と常口頃言いながら、完成を見ずして逝去しました。その建設は病院の医療遂行面と同様に細心の注意を払って計画され、近代ゴシック様式によるデザインは、先生の意向通りの宗教建築らしい荘厳さと威容を誇っています。単に身体だけではなく、心を含め全人的に癒されることを意識した時、キリストの存在を指し示す礼拝堂がこの病院に必要だったのでしょう。

旧病院三階から六階までの各階から、バルコニー越しに礼拝を可能にしている多層会衆席は独特のもので、入院患者は各階から自由に礼拝に参加することができます

*聖別
人や物を儀式によってさめ、世俗的使用から区別する。

した。隣の区画の新病院からも、ブリッジを渡ってまで礼拝堂に来る患者も少なからずあり、現在あるいは過去に聖路加と繋がりをもつ人々を中心に、日曜日の礼拝は今もなお護られ続けています。それだけではなく、病院、看護大学のスタッフや学生・卒業生の結婚式や、聖路加と何らかの関係がある人々の葬儀なども執り行われております。

ステンドグラスはすべて、J・V・W・バーガミニー氏が原寸図面を描き、その図面をイギリスのペリキントン社に送り注文したとあります。そしてその組み立ては、東京尾山台の別府ステンドグラス製造所にて行われました。

一九三〇年（昭和五）より設計管理者として入ったこのバーガミニー氏は、米国聖公会の設計技師として来日され、立教女学院やユニオンチャーチ（青山参道）なども手がけています。また別府一族は一九〇七年（明治四〇）頃からこの仕事に従事し、礼拝堂の仕事は初代と二代目、一九七七年（昭和五二）の修復は四代目によるものです。色彩鮮やかな九面の薔薇窓のほかに、縦長のランセット窓には、聖ペテロ、聖アンデレ、聖ヨハネらの使徒たちや、イエス、魚、雄鶏、船、錨、貝、星、葡萄などの様々なシンボルが配され、神秘的な『光の芸術』です。

十字架の塔からは、一日三回、鐘による聖歌のメロディーが流れています。このカリヨン・チャイムは、一九六二年（昭和三七）に日米両国民の親善の証として、

米国聖公会の有志より寄贈されたものです。その後、一九八七年（昭和六二）と二〇〇八年（平成二〇）にリニューアルされています。（米国Schulmerich社製）礼拝堂に通じる中央ホールの廊下には真鍮のプレートがいくつか埋め込まれています。そのうちの一つは、羽のついた杖に二匹の蛇が絡んだデザインのもので、医术を表すシンボルです。他に七枚のプレートがあり、そこには伝染病をもたらす動物などが描かれています。フエニックスは病気の回復、アラジンの魔法のランプは迷信を戒める、タルバカンハ Pest 菌を介在する巨大なネズミ、鯛は傷みが早い食品、ネズミ、オウムは伝染病をもたらす動物、天秤は薬学などの意を表しています。これらの伝染病を運ぶ動物は病院の大敵でした。そのため、廊下にプレートを埋め込んで、病院職員が足で踏みつけて歩き、厄を祓うというものでした。

礼拝堂に入って後方を見上げると大きなパイプオルガンがそびえ立っています。聖ルカ礼拝堂オルガン委員の中村ひろ子さんは次のように話しています。「これは一九八〇年（昭和五五）から七年間病院長を務めたルカ野辺地篤郎先生（一九一九―二〇〇八）のご尽力で、一九八八年（昭和六三）に設置されたものです。フランスのガルニエ・オルガン工房にて製作された北ドイツ・バロック様式。三段の鍵盤と足鍵盤をもち、二〇七七本ものパイプを備えています。二〇〇三年（平成一五）の改修により音色に一層円熟味が加わり『礼拝堂の音響特性とも相俟って、重

*別府ステンドグラス製造所
「聖路加国際病院聖ルカ礼拝堂・都市環境と歴史的建造物保存に関する調査・研究」、鈴木博之著、東京・第一住宅建設協会、1980。

*神秘的な『光の芸術』
佐藤裕、聖路加国際病院チャペルのシンボル「聖路加チャペル「ミース」No.107: 1-26 (2003)」。

厚感がある上に、繊細でバランスの良い音色』であると、レコーディングエンジニアの鈴木数秀かずひでさんは述べています。主日やクリスマスなどの礼拝だけでなく、病院や看護大学の感謝礼拝、第一水曜日の『夕の祈り』でも美しいオルガンの音色が響きます。元ニューイングランド音楽院教授の林佑子先生が主任オルガニストを務め『St. Luke's』のオルガンは世界的にも知られています。」

実習中の学生やボランティアの方々が患者さんを礼拝堂にお連れすることも多く、オルガニストたちは、会衆席におられる方のことも常に思いながら弾いています。オルガンの音色に包まれて祈る患者さんの姿は聖路加ならではのものでしょう。聖路加の象徴とも言える、この礼拝堂をこれからも大切に護っていききたいです。

(亀井 智子・金澤 淳子)



聖路加看護大学には、こんな由緒ある品々があります。

礎石と十字架

大学の玄関外壁、および大学と敷地続きの聖路加国際病院第一街区トイ斯拉ー記念館左側、およびチャペルに通じる旧病院玄関右側に礎石が置かれています。

現在の看護大学、および病院の敷地を含む明石町一帯は、明治初期は外国人居留地に指定されていました。明治時代の前半は、宣教師や宣教医師が次々と派遣され、いくつもの病院や薬局、学校などがこの明石町ではじめられました。

一八五九年（安政六）にハリスが港区元麻布の善福寺に米国公使館を開設しましたが、一八七五年（明治八）に築地居留地の明石町（現在の第三街区聖路加ガーデンのあたり）に公館を新設しました。花崗岩でできた石標には、米国のシンボルである星条旗や鷲のマークが彫られており、当時を偲ぶことができます。後に、米国公使館は一八九〇年（明治二三）に現在の元赤坂に移転しています。

米国公使館を含む明石町第三街区の土地一体は、**聖路加病院拡張計画**のため購入

* 聖路加病院拡張計画

一九一七年（大正六）、トイ斯拉ー院長の募金活動によって集められた四四万ドルで、明石町に一万三〇〇〇平方メートルの土地を購入し、敷地を拡張した。

されたものですが、石標はその時に聖路加病院が譲り受けたものです。八個の石標のうち、三個は一九八四年（昭和五九）に米国大使館に日米友好のシンボルとして寄贈され、残る五個は築地の居留地時代を伝えるものとして、中央区文化財に登録され、三個はトイスラー記念館前に、二個は聖路加ガーデンに移設されました。

一九三〇年（昭和五）三月二十八日に旧病院の定礎式が行われ、基礎石の一面に徳川家達公の揮毫（直筆）による「神の栄光と人類奉仕のため」（翻訳 東京帝国大学教授姉崎正治博士）が刻まれました。

第二次大戦中「神の栄光」と刻まれた礎石は爆撃の目標になるため、一九四四年（昭和一九）に遮蔽されました。同様に、病院塔屋の十字架も切断されましたが、当時の信仰に対する外部圧力について、竹田チャブレン（二八九六―一九七八）の苦悩は察して余りあるものがあつた。竹田チャブレンと夫人は毎朝チャペルで二人きりで祈りを捧げること続けられた」とその時の状況が聖路加国際病院二〇〇年史に書かれています。

一九五六年（昭和三一）に病院の接收が解除され、同年九月一八日に旧病院屋上で、十字架奉献式が行われました。礎石を遮蔽していた御影石も外され、前述したトイスラー記念館の左側に移築、保存されました。

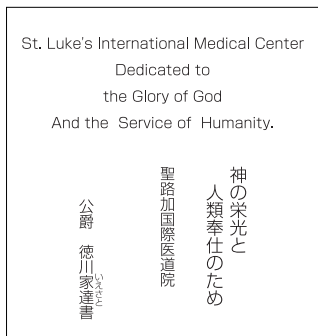
もうひとつの礎石は、本字一号館正面玄関左手側の外壁にはめ込まれています。

この礎石は、一九九六年（平成八）九月一日に現在の聖路加看護大学新校舎の竣工を祝い、日野原重明理事長の手により直筆されたものです。本学の精神「知と感性と愛のアート」と記されているように、理事長の看護と看護大学に対する深い思いがこめられ、正に私達の看護の礎となっています。

図書館を彩る葡萄の意匠とナイチンゲールのステンドグラス

図書館入口の欄間には、ガラスに葡萄の意匠が施されています。これは、一九九六年（平成八）七月まで旧校舎の玄関ホールの欄間にあつた木彫りの飾りから想を得ています。現在、この飾りは、図書館三階に掲げられています。葡萄は、緑陰で憩う人々を思い起こさせるためか、聖書の中では無花果と合わせて平和と豊穡の象徴とされ、記述として多く登場します（「聖書植物図鑑」大槻虎男著、教文館、一九九二年）。「聖路加看護大学図書館のめざすもの」の一つに、安心して学ぶ環境をつくるがありますが、葡萄は、それにふさわしい意匠といえます。

また、館内の階段の踊り場には、大学のシンボルでもあるナイチンゲールのステンドグラスがあります。これは一九九六年（平成八）の校舎建築の折、檜垣マサ先生から寄贈されたもので、製作者は鈴木幸江さん（一九七一年卒）と戸田倫子さんです。檜垣先生は、この校舎建築のために参与として尽力されましたが、残念



*竹田チャブレン
竹田眞二（二八九六―一九七八）。築地の三神学校卒業後、聖路加国際病院に勤務。一九七七年（昭和五二）に司祭職となり、その一生を聖路加に捧ぐ。

なことに完成を見ずに逝去されました。ナイチンゲールのドレスは濃い紫色で、よくみると白い襟には撫子のような花模様があります。撫子は校章の意匠の一つです。背後には光の輪があり、ラテン語で「光あれ」と書かれています。その周囲にも撫子が配されており、背景のガラスには葡萄の模様がみられます。

ステンドグラスは東に面しており、早朝、開館時の短い間だけ陽光が入り、ナイチンゲールがもつランプの赤い光が階下に映ります。夜は外から見上げると、室内の灯りを通して浮かび、一日の学びを終えて帰途につく学生を見送ります。

マントルピースと玄関の人形

聖路加看護大学の玄関ロビーでは、マントルピースとその上に「希望」と題した人形が来訪者を迎えています。マントルピースは旧校舎で使用されていたものを新校舎に移設したのですが、当初は新校舎の会議室に置かれる予定でした。しかし、大きさが合わず、一部を切断しなければならぬこととなり、現在のロビーに置かれました（当時の総務課長 八坂ヨシエ氏談）。

マントルピースの上に飾られている人形は、昭和二年厚生科を卒業した鐸木能子（旧姓 細野）さんが本学の新校舎落成を祝い一九九八年（平成一〇）に贈呈して下さったものです。

鐸木さんは群馬県伊勢崎市の蠟燭問屋の生まれで、前学長 常葉恵子先生と同期生ですが、一九六五年以降人形作家になり日展会友、新工芸会員としてアーティスティックな創作人形を創る一方、伝統技法を生かした新しい気風の雛人形作家として活躍しました。

鳩を抱え、空を見上げている女性の人形像は、平和と希望を表現した作品で、伝統技法に加えた、鐸木さん独自の人形技法をみることができます。

鎌倉アリスの家のほじまりと新渡戸稲造夫人が愛用した椅子

新渡戸稲造氏は昔、トイスラー夫妻を鎌倉稲村ヶ崎の家に招き、「この家を病院の職員の安息所にしてはどうか」と話されたそうですが、当時は手が届きかねるといった事情があったようです。

その後、氏は、聖路加病院新館定礎式（一九三〇年三月二十八日）への出席や病氣治療を通じて聖路加とのつながりがあり、一九三九年（昭和十四）に聖路加同窓生の休養所として新渡戸夫人の満里子（メリー・パターソン・エルキントン）さんの住んでいた別荘を、建物と借地権含め七、五〇〇円で聖路加に譲渡しました。これが、休養所アリスの家です。建物は二〇年前のものであったため、当時としては大金の一、五〇〇円かけて修復しました。

*「光あれ」
Fair Lux

*新渡戸稲造

一八六二年（文久二）盛岡市に生まれる。一八七七年（明治一〇）札幌農学校入学。クラーク博士の影響でキリスト教に入信。東京帝国大学およびジョン・ホプキンス大学で学び農学博士・法学博士となる。第一高等学校長、東京帝国大学教授、東京女子大学初代学長、国際連盟事務次長、貴族院議員を歴任し、一九三三年（昭和八）一〇月カナダで客死。「農資本論」（一八九八年、武士道（一八九九年）等の著書あり。

*メリー・パターソン・エルキントン

フィラデルフィアの美術家の一人娘でアメリカ人。実家は敬虔な清教徒。遺産の一、〇〇〇ドルを使い、色々な事情で就学出来ない児童のための遠友夜学校を夫稲造と共に開設（一八九四―一九四四年）。稲造没後一九一三年（大正二）まで二代目校長として学校を運営。

高橋シュン先生が寄稿した聖路加看護大学五〇年史によれば、「アリスの家の維持には大変お金がかかり、同窓会にアリスの家復興委員会がおかれ、バザーを度々開催して、屋根や垣根等の修繕費用に充て、同窓会からも台所の整備費等を寄贈していました。また、土地が売りに出されたこともあったようですが、先輩達が苦勞して手に入れた家であったため、手離すことはしなかった」と記されています。

アリスの家の名前は、学校と看護師のために絶えざる指導と熱心なる後援を続けられたミセス アリス・セントジョン初代主事を記念してつけられました。聖路加幼稚園を開設し、専門学校の分校として一九四七年（昭和二十二）には育児科の実習場となりました。その後一九六〇年頃、大学が買い取り、一号館として同窓生のアリスの家が建築され、二〇〇〇年（平成一二）には全面改築されています。

大学旧校舎には、新渡戸稲造夫人が愛用したと伝えられる藤製の大きな椅子があり、学長室に続く廊下に置かれていました。新校舎移転の責任者であった現学部長菱沼典子教授によれば、藤の椅子は傷みがひどく、新校舎では使用できないと判断して移転の時に処分したとのことでした。

昭和初期に製作されたブロンズ製の窓枠の再生

大学旧校舎の正面玄関の上には、建物の二階から三階にかけての外壁にブロンズ

製の壁飾りがありました。当時の校舎の正面写真には必ず映り、また現在大学の玄関ホールに飾られている校舎風景の油絵にも描かれています。

この壁飾りは、旧校舎落成時の一九三三年（昭和八）に設置され、旧校舎の二階スタディールーム、三階第二教室の窓を覆うほどの大きなものでした。現在では作ること自体が難しいものです。アルデコ様式は、一九二五年（大正一四）パリで開かれた国際装飾芸術博覧会をきっかけに世界中に広まった装飾で、流行の先端をいくデパートなどがすすんで取り入れたようですが、現在はほとんど姿を消しています。

窓枠は、旧校舎を解体する時に取り外され、病院二階の図書室の外壁に移築されています。現在の建物ともよく調和し、七六年経た今でも立派に青銅色を放っています。

旧校舎から新校舎に持って来た品々

大学の歴史を良く知る、前出の八坂ヨシエさんによれば、旧校舎で聖路加看護大学が大切に使用してきた次の品々を新校舎移転のときに運んできたとのこと。現在も使用されているものもあり、古きよき物の中には、今ではなかなか手に入らない物も含まれています。



ブロンズ製の窓枠

・サモワール

卒業式翌日の卒業生と教員の祝会や、クリスマスの集いのときのみ使用され、教員が学生に紅茶をサービスしました。一台は炭、もう一台は電気で使うものです。現在二階の栄養実習室にあります。修理が必要な状態です。

・教室の椅子

木製の片肘椅子、および一部藤が編みである椅子は、主に教員の研究室でそのまま使用しています。

・旧図書館のスタディルームの椅子。現在、教員ラウンジなどで使用しています。

・雑食器
栄養実習という科目で、調理実習を行った際に使用していた食器類の一部を二階の調理実習室(学食)棚に一部保管しています。

(亀井智子・松本直子)

*サモワール
ロシア特有の湯沸かし器。一九世紀頃、ロシアで紅茶の普及によって広がった。古くは石炭・炭で沸かした。



聖路加看護大学はどのような将来展望を持っていますか。

聖路加看護大学の将来展望は、本学の原点とつながっています。創立者トイスラーは、一九二〇年(大正九)に聖路加国際病院付属高等看護婦学校をつくりました。学校開設時、高等女学校(現在の高等学校と同等)の卒業を入学資格としました。また、病院付属の看護婦学校であったにもかかわらず、卒業後に聖路加国際病院への就職を義務づけませんでした。この二つの特徴によって、日本の看護の高等教育は聖路加で始まったと評価されています。そして、学校開設後すぐに、学校保健、助産、公衆衛生を教育課程に取り入れました。これは、当時の日本の健康水準や生活環境を考慮した「時代の要請」にもとづいたものといえるでしょう。

その後、聖路加女子専門学校、(三年制の)聖路加短期大学を経て、一九六四年(昭和三九)に聖路加看護大学となり、私学として日本最初の看護学部四年制教育を開始しました。一九七六年(昭和三一)には、看護短期大学卒業生を対象とした編入学制度を全国で初めて開始しました。この制度は一九九七年(平成九)より始

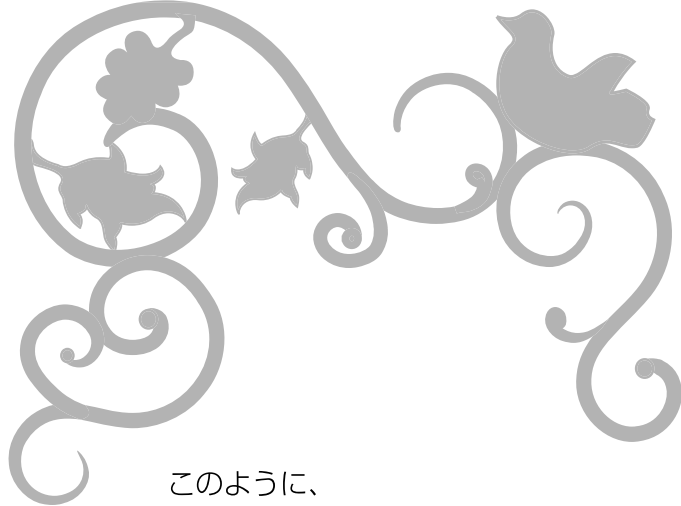
められた学士編入制度に引き継がれています。

一九八〇年（昭和五五）には大学院博士前期課程が、一九八八年（昭和六三）には大学院博士後期課程が設置されました。前者は全国で二番目、私学では初めてでした。後者は看護学研究科として日本で最初の博士課程となりました。その後、大学院博士前期課程に専門看護師コースを開講（一九九七年）、さらにウィメンズヘルス・助産学専攻を増設（二〇〇五年）して、助産課程を大学院教育に移行しました。

さらに、看護実践開発研究センターの開設（二〇〇二年）にあわせて、二一世紀COEプログラム「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」の採択（二〇〇三年）とその後五年間の研究・実践活動は、本学の大きなターニングポイントとなりました。つまり、これまでの医療・看護提供者主導型から市民主導型の健康づくりというパラダイム転換を行ったのです。研究センターは、看護実践開発に関わる研究を行い、看護サービスにおけるモデル的な実践の場を提供し、市民や看護職への生涯学習支援を行ない、国際的・学際的な交流を促進していくとともに、研究助成金情報の提供や管理などの研究支援と、研究成果をデータベース化して情報を発信するなど、本学の活動を大きく拡大させています。二〇〇七年（平成一九）一〇月よりスタートした文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」による

「南関東圏における先端的がん専門家の育成」事業によって、がん看護専門看護師教育の充実と、がん化学療法看護認定看護師教育が実施され、MD Anderson Cancer Center とのがん看護交流ワークショップも実施されています。また、現在、財団法人聖路加国際病院が建設中の産科診療所は、本学の教員が中心となり助産師が主体となつて高度な実践を市民に提供しようというコンセプトをもって進行中です。

本学のさまざまな活動は、次のミッションに集約されます。「本学は基督教精神を基盤として、看護保健の職域に従事する看護専門指導者の育成を目的とする。即ち、治療予防保健指導の各面に必要な看護に関する科学的知識を養い、技能の熟達を図り、人格の涵養につとめ、指導者としての能力をたかめ、学術を中心とした看護の実践と応用によって、看護および看護教育の進歩発展に寄与し、もつて国民の福祉に貢献することを使命とする」（学則第一条）。看護学部は三〇〇名、大学院は九〇名を定員とする単科大学としての聖路加看護大学は、看護学の研究・教育そして、優れた実践家としての「看護専門指導者」を育成し、創立者トイスラーの残したメッセージ「最善をつくせ、しかも一流であれ（Do your best and it must be first class）」を追求しています。少子高齢社会における保健医療福祉領域の課題に、看護の力をどう発揮できるのか、教育課程は怎うするか、人格の



このように、
いつまでも存続するものは、
信仰と希望と愛と、
この三つである。
このうちで最も大いなるものは、
愛である。

新約聖書
コリント人への第一の手紙
第13章13節



涵養のための教養科目の充実はどうあるべきか、そして、大学運営を支える財政基盤をどうするかなど答えを模索しながら、看護に正當にコミットしていく大学として着実に歴史を刻んでいくことであろう。

(井部 俊子)

おもな引用・参考文献

- ・天野郁夫編（一九九七）．大学を語る三人の学長．玉川大学出版部
- ・松垣マサ（一九八三）．建学の精神を生かした看護教育．看護．三五（一四）．一三・一〇
- ・金子光編著（一九九二）．初期の看護行政．看護の灯たかくかかてて．日本看護協会出版会
- ・金子光（一九六三）．看護の灯たかくかかてて．新看護制度一五年のあゆみ．医学書院
- ・金子光（一九九四）．看護の灯高くかかてて．金子光回顧録．医学書院
- ・厚生省健康政策局計画課監修（一九九三）．ふみしめて五〇年・保健婦活動の歴史．公衆衛生協会
- ・川島みどり他（一九九三）．一つの看護教育史一九四六―一九五三．東京看護教育模範学院で学んだ人々．健和会臨床看護研究所
- ・厚生省健康政策局計画課監修．ふみしめて五十年．保健婦活動の歴史．（財）日本公衆衛生協会（一九九三）
- ・中村徳吉（一九六八）．聖路加国際病院創設者ルドルフ・ボリング・トイスラー小伝．聖路加国際病院
- ・日本看護協会編（一九八七）．日本看護協会史第一巻．昭和二年（一九四六）―昭和三年（一九五七）．日本看護協会出版会
- ・大槻虎男（一九九二）．聖書植物図鑑．教文館
- ・ライダー島崎玲子．大石杉乃編著（二〇〇三）．戦後日本の看護改革―封印を解かれたGHQ文書と証言による検証．日本看護協会出版会
- ・聖路加チャペルニュース（一九六二）．聖路加国際病院礼拝堂
- ・聖路加同窓会編（一九八二）．聖路加同窓会一〇年の歩み．一九七〇―一九八〇．聖路加看護大学創立六〇周年を記念して．聖路加同窓会
- ・聖路加同窓会編（一九四二）．聖路加同窓会たより（同窓会誌）（会報）．聖路加同窓会
- ・聖路加看護大学（一九七〇）．聖路加看護大学五〇年史．聖路加看護大学
- ・聖路加看護大学創立七〇周年記念誌編集企画委員会編集（一九九〇）．聖路加看護大学の七〇年．一九二〇―一九九〇．聖路加看護大学
- ・聖路加看護大学大学院開設二〇周年記念行事実行委員会編（二〇〇二）．聖路加看護大学大学院開設二〇周年記念誌．一九八〇―二〇〇〇．聖路加看護大学
- ・聖路加看護大学編（一九七二）．聖路加看護大学学園ニュース．聖路加看護大学
- ・聖路加看護大学理事会議事録．評議員会議事録
- ・聖路加看護大学紀要委員会（一九七二）．聖路加看護大学紀要．聖路加看護大学
- ・聖路加国際病院一〇〇年史編集委員会（二〇〇二）．聖路加国際病院の一〇〇年．聖路加国際病院
- ・聖路加国際病院八〇年史編集委員会（一九八二）．聖路加国際病院八〇年史．聖路加国際病院
- ・聖路加国際病院（一九五五）．聖路加国際病院院内広報誌「明るく窓」．聖路加国際病院
- ・聖路加国際病院聖ルカ礼拝堂のご案内．リーフレット．聖路加国際病院礼拝堂

編集後記

聖路加看護大学大学史編集・資料室 室長 渡部 尚子

大学の精神は、その歴史によって形成されます。この小冊子『聖路加看護大学のあゆみ』は、聖路加看護大学の過去・現在・未来を、本学学生および同窓生・教職員、そして一般の方々にも語り伝えるために編まれました。

この冊子は二六の項目から構成されています。これらの項目は、本学教職員から「聖路加看護大学について学生へ伝えたいもの」として提案された様々な意見をカテゴリー化し、最も多く提案のあった内容から選んだものです。その執筆は、本学教職員および同窓会役員を中心にお願いしました。また、選定に関しては、本学の歴史や状況が全体的に概観できるよう、各時代の出来事を入れました。

本冊子の主要な読者は、本学学生・教職員・同窓生であることは言うまでもありませんが、本学がどのような大学であり、また社会（特に看護界）においてどのような役割を果たしてきたのか、或いは果そうとしているのか、広く一般の方々にも知って頂くために、執筆者には読みやすく親しみやすい表現で書いていただきました。

各項目はそれぞれ独立しております。各執筆者は、与えられたテーマについて、ぜひ伝えたいこと、知ってもらいたいことを、心を籠めて記述しております。従って、全体の項目を読むと、同じ事柄が重複して出てくることもあります。編集作業では、執筆者の思いや文脈を尊重し、敢えて削除や調整をしませんでした。また、項目によって力点の置き方が異なるものもあります。それも、歴史に対する複眼的視点が各目にあつてよいといつづに判断致しました。

年号については、西暦を中心にし、カッコ内に元号を入れることを原則としました。また、三つの看護職（保健師・助産師・看護師）についてのそれぞれの呼称は、その時代の呼称（保健婦・助産婦・看護婦）を使用することも良しとしております。

今回この冊子を発刊するにあたって、創立九〇周年記念に間に合わせるために、当初の予定より大幅に準備期間を短縮せざるを得ない状況がありました。そのため、諸資料収集が間に合わず、本冊子への掲載を断念した項目があります。それは、本学における学生運動と、戦前、日本の植民地であった台湾・朝鮮から、本学で学ぶために内地留学してきた学生についての項目です。これら二つについては、改めて記録に残したいと考えております。

最後に、この冊子作成にあたり、資料提供・執筆をはじめ、様々な協力を下さった本学教職員および同窓生の皆様に心からお礼申し上げます。また、この冊子刊行にあたって、予算的支援を賜りました同窓生の皆様に感謝申し上げます。

記述に関しては、歴史的検証と誤謬についてご指摘いたしますようお願い申し上げます。

西暦	創設以前		聖路加看護大学		聖路加看護短期大学	
	学校関連の出来事	社会一般の出来事	聖路加看護短期大学	聖路加看護短期大学	聖路加看護短期大学	聖路加看護短期大学
一九〇〇	一月トイスラー来日		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九〇二	三月看護学を学ぶため荒木いよ看護婦長渡米		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九〇四	聖路加国際病院開設（二〇床）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九〇六	米国式看護教育 教育期間二年、入学条件：高等女学校卒業		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九〇八	初代校長 ルドルフ・B・トイスラー 就任		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一〇	聖路加病院新築資金の一部として大正天皇より御内帑金五万円下賜		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一四	ミセス・セントジョン米国より看護教育のため招聘		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一五	トイスラー院長、ミセス・セントジョン看護班としてシベリアへ赴く		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一六	聖路加国際病院付属高等看護婦学校開設		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一七	（教育期間二年、応募資格：高等女学校卒業、八〇名応募し、二七名入学、一五名卒業）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一八	九月関東大震災により校舎・寄宿舎・病院焼失		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九一九	一〇月（天幕病院（二五床）設置）、学生は天幕病院で起居し学習・実習を続ける		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二〇	（母子保健を中心とした訪問看護事業開始）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二一	（東京市長依頼にて、院内に児童健康相談所開設）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二二	仮校舎・寄宿舎完成		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二四	トイスラー院長勲五等瑞宝章受章		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二五	公衆衛生看護婦（ミス・ヌ）招聘		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二六	（スクールクリニック開設）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二七	築地産院にて産婆実習開始		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二八	（文部省に学校保健婦を派遣）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九二九	（財）聖路加女子学園設立、文部省専門学校令に基づく聖路加女子専門学校開設		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三〇	（公衆衛生看護部誕生（ミス・ヌ、斎藤みどり））		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三一	研究科（公衆衛生学専攻）開設		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三二	他校の卒業生の研究科入学を許可		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三三	聖路加女子専門学校新校舎落成		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三四	ロックフェラー財団より四〇万ドルの寄付		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三五	（聖路加国際病院本館完成（奉獻式・開院式））		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三六	八月トイスラー校長逝去		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九三八	第一二代校長 久保徳太郎 就任		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四〇	修業年限四年に延長し、研究科廃止		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四一	（病院内に「東京市京橋区特別衛生地区保健館（中央保健所の前身）」設立し、病院のスタッフと公衆衛生事業を移管）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四二	（チャペル完成）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四三	（財団法人 聖路加国際×ティカルセンター設立許可を受ける）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四四	他校の看護婦学校出身者を対象とする公衆衛生看護学専修科（ハケム）設置（同年中止）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四五	第二二代校長 橋本寛敏 就任		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四六	二月校歌・校旗・校章制定		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四七	三月ミセス・セントジョン、ミス・ヌノ米国へ帰国		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四八	七月興健女子専門学校に改称、別科（二年）を附設		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九四九	一〇月中等学校教員免許（生理・衛生 無試験下附）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五〇	第一種保健婦学校に指定		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五一	産婆学校の指定		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五二	（聖路加国際病院から大東亜中央医道院に改名）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五三	三月戦時下体制に則り厚生科修業年限を三年に短縮、研究科一年を設置		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五四	一〇月中 高等女学校教員免許（家政科 育児）無試験下附		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五五	三月東京大空襲により病院に傷病者多数受け入れ、学校地下体操場も病室となり学生も救護に従事する		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五六	八月無期休校		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五七	九月GHQに病院 学校とも接収		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五八	一〇月授業再開（教室は中央保健所）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九五九	（隣接する都立整形外科病院に移転し、診療開始）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六〇	一二月校名を聖路加女子専門学校に戻す		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六一	六月GHQの指導のもと、東京看護教育模範学校となり、日本赤十字社看護看護婦養成部と合同授業開始		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六二	アリスの家 同窓生保養所、於鎌倉を分校として 聖路加幼稚園を開設し、育児科の実習実施		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六三	六月研究科一年設置		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六四	研究科卒業生に中・高等女学校教員免許（家政育児）無試験下附		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六五	九月第四代校長 ミス・ホワイ特 就任、主事 湯横ます 就任		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六六	戦後初の看護職の留学到卒業生四名（湯横ます、金子光、高橋シン、中道千鶴子）が選ばれカナダ・米国へ留学		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六七	保助看護法に基づく甲種看護婦学校に指定		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六八	二月（病院の旧館接收解除、旧館に戻って診療再開）		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九六九	四月 旧館校舎（木造校舎）返還、築地での授業再開		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立
一九七〇	五月 学校法人 聖路加看護学園設立		聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立	聖路加看護短期大学設立

執筆者

麻原きよみ	有富洋子	飯田澄美子	井部俊子
今村節子	岩井郁子	岩間節子	内田卿子
及川郁子	大熊恵子	金澤淳子	亀井智子
萱間真美	小松浩子	佐居由美	進藤 務
高橋百合子	田代順子	千葉千栄子	菱沼典子
堀内成子	松谷美和子	松本直子	森 明子
安ヶ平伸枝	柳橋礼子	山口喜義	山田雅子
結城瑛子	渡部尚子		

聖路加看護大学大学史編纂・資料室委員会
ブックレットワーキンググループ

大森純子	佐居由美	進藤 務	中村綾子
新沼久美	松本直子	渡部尚子	

(以上、五十音順)

聖路加看護大学のあゆみ

2010年1月25日 初版第1刷発行

企画・編集 聖路加看護大学大学史編纂・資料室委員会
ブックレットワーキンググループ

発行者 聖路加看護大学
〒104-0044 東京都中央区明石町10-1

デザイン 株式会社 ウチダテクノ 坂本やす葉

印刷 株式会社 栄美通信 (制作：パウル)

